

群馬県無形文化財緊急調査報告書
群馬県教育委員会編

小正月のつくりもの(二)

西毛編

目 次

序 文

無形文化財緊急調査実施要綱

（総 論）

西毛地方の「小正月のつくりもの」

一、はじめに	3	七、小正月行事とのかかわり	20 頁
二、西毛地方のつくりものの特色	4	里見又市家のつくりもの	22
三、調査家庭の特色	6	一、概 観	22
四、おわりに	7	二、山入り	22
（各 論）		三、木の種類	23
関沼内蔵家のつくりもの	8	四、作る日・場所・道具	23
一、概 観	8	五、ものづくり	23
二、山入り	8	六、飾りかえ・供え方	23
三、木の種類	8	七、小正月行事とのかかわり	26
四、作る日・場所・道具	9	八、おわりに	27
五、作り方	10	斎藤茂三郎家のつくりもの	28
六、お飾りかえ	11	一、概 観	28
七、小正月行事とのかかわり	13	二、山入り	28
森泉七四郎家のつくりもの	16	三、木の種類	29
一、概 観	16	四、作る日・場所・道具	29
二、山入り	17	五、作り方	30
三、木の種類	17	六、飾りかえ・供え方	30
四、作る日・場所・道具	17	七、小正月行事とのかかわり	33
五、作り方	17	高橋登美治家のつくりもの	35
六、お飾りかえ	18	一、概 観	37
七、小正月行事とのかかわり	18	二、山入り	37
森泉七四郎家のつくりもの	19	三、ものづくり	37
一、概 観	19	四、お飾りかえ	37
二、山入り	19	五、小正月行事とのかかわり	40
三、木の種類	20	六、おわりに	40
四、作る日・場所・道具	20	一、はじめに	43
五、作り方	20	二、行 事	43
六、お飾りかえ	21	三、小正月行事とのつながり	43

津上家家のつくりもの

一、概観

二、山入り

三、木の種類

四、作る日・場所・道具

五、作り方

六、飾りかえ・供え方

七、小正月行事とのかかわり

八、つくりものの処分

九、その他

十、まとめ

神戸国吉家のつくりもの

一、概観

二、山入り

三、木の種類

四、作る日・場所・道具

五、作り方

六、飾りかえ・供え方

七、小正月行事とのかかわり

八、つくりものの処分

九、その他

十、まとめ

斎藤治郎家のつくりもの

一、概観

二、山入り

三、木の種類

四、作る日・場所・道具

五、作り方

六、飾りかえ・供え方

七、小正月行事とのかかわり

八、小正月の供えもの・飾りものの片づけ

九、その他

十、まとめ

三木の種類

一、作る日・場所・道具

二、作り方

三、飾りかえ・供え方

四、小正月行事とのかかわり

五、つくりものの処分

市川太平家のつくりもの

一、概観

二、山入り	66
三、木の種類	66
四、作る日・場所・道具	66
五、作り方	65
六、飾りかえ・供え方	64
七、小正月行事とのかかわり	63
八、つくりものの処分	62
市川太平家のつくりもの	61
一、概観	61
二、山入り	61
三、木の種類	61
四、作る日・場所・道具	61
五、作り方	61
六、飾りかえ・供え方	60
七、マユカキと片づけ	60
八、養蚕とつくりもの	59
九、その他	58
十、まとめ	59
上原富次家のつくりもの	77
一、概観	77
二、山入り	77
三、ものづくり	77
四、お飾りかえ	77
五、道祖神とドンドン焼き	77
六、十五日粥（小吉粥）	77
七、マユカキと片づけ	78
八、養蚕とつくりもの	78
九、その他	78
十、まとめ	78

無形文化財緊急調査実施要綱

1. 趣旨

本県には多種多様の無形文化財が存在しているが、社会生活の変化により急速に消滅しそうとしている。そこで、特に重要なもので、緊急に保存対策を講じなければならぬ無形の文化財について、調査のうえ記録を作成し、保存対策の基礎資料を得る。

2. 調査対象

「小正月のつくりもの」

元旦を中心とした大正月に対して、正月十五日前後の小正月には古くから農作祈願の一つとしての豊作予祝行事が集中している。その一つとして小正月のものつくりの行事がある。小正月を迎えるにあたってものつくりをして飾りかえを行ふこの行事は、地域によって「ものつくり」・「飾りかえ」など様々な呼称で呼ばれ、実際につくられるものの種類も豊富である。

マユダマニズリバナはつくりものの代表的事例であるが、その他県内では「穂穂、俵、農道具一式、木力類、ドウロクジン（道陸神）」はじめとする各種木像類、カユカキ棒、ハラミ等などの製作が知られ、それらの地域的特色も著しい。

これらの製品は庶民の生活と密接なかかわりをもちながら今

日まで人々に親しまれてきたが、近年ではそれらの製作に携わる人々も減少し、作品の種類も減少しつつある。

そこで、現在残存している製作技術を中心に、事例ごとに（特定の個人の家ごとに）、「小正月のつくりもの」全てにわたって調査する。

3. 調査主体者 群馬県教育委員会

4. 調査計画

（1） 調査期間

昭和六十年度より昭和六十三年度までの四年計画。

（2） 調査地域

県下全域であるが、各年次ごとの調査地域は以下のとおりである。

○昭和六十年度（第一年次） 善慈地方

○昭和六十一年度（第二年次） 西毛地方

○昭和六十二年度（第三年次） 利根地方

○昭和六十三年度（第四年次） 中・東毛地方

※なお、詳細は別掲地図を参照。

（3） 調査員（昭和六十一年度）

阪本英一 県立図書館専門員

阿部 孝 元新治村立人須川小学校長

奈良秀重 中之条町文化財調査専門委員長

神宮善彦 県立歴史博物館学芸員

井野修一 前橋市教育委員会社会教育課主任

(4) 調査対象者(昭和六十一年度)

○藤岡市

関治内蔵 (藤岡市金井二九五)

○安中市

森泉七四郎 (安中市鷺宮二八一)

○棟名町

里見义市 (群馬郡棟名町下里見三七〇)

○万場町

斎藤茂三郎 (多野郡万場町万場一〇五〇)

○中里村

高橋富美治 (多野郡中里村神ヶ原乙九九一)

○上野村

滝上夏男 (多野郡上野村植原九十七)

○下仁田町

神戸国吉 (甘樂郡下仁田町青倉一〇六〇)

斎藤治郎 (甘樂郡下仁田町上小坂六三九)

○南牧村

市川太平 (甘樂郡南牧村町大日向二〇六八)

○甘楽町

浅香英雄 (甘樂郡甘楽町秋畠五三一三)

○松井田町

上原富次 (碓氷郡松井田町新堀一四二二の二)

5. 調査内容

(1) 特定個人の家ごとに「小正月のつくりもの」全てにわ

たって、その種類・技術・特色などについて調査する。

(2) 伝統と製作技術の継承

6. まとめ

(1) 調査資料・図面・写真などの作成・保存。

(2) 各年次ごとに調査報告書「小正月のつくりもの」を発行する。

(3) 調査の際に製作された作品については、製作者の承諾をもとに、県立歴史博物館にて保管。

西毛地方の「小正月のつくりもの」

一、はじめに

西毛とは、おおよそ利根川西の地域から吾妻郡と北群馬郡を除いた地域をさし、榛名山南面から埼玉県境までの広い範囲にあたり、北から、烏川・碓氷川・鱒川・神流川の四つの川がほぼ東流して、それぞれの流域に特色ある文化圏のようなものを形づくり、全体として西毛らしさをつくっている。

(一) 烏川流域

群馬郡および高崎市の一部。特に烏川上流の倉渕村や榛名町などは、屋敷神にオシリヨウサマが関連している地区で、「小正月のつくりもの」はニワトコで作られ、ドンド焼きや道祖神信仰がさかんで、かつては「水祝い」(花聲への水かけ)も行われた。

(二) 碓氷川流域

碓氷郡・安中市および高崎市の一部(旧碓氷郡)で、ドンド焼きで木刀をこがして門口に飾って魔除けにすること、鳥追いや鳥追い祭りは現在も続けられている。

(三) 鰐川流域

甘楽郡・富岡市・多野郡の一部(吉井町)で、こがした木刀を飾るが、ハナをカズガラ(和紙の原料とするため皮をむいた楮の木)で作ることや、これを富岡の市に売りに出た例などが目立つ。

(四) 神流川流域

多野郡・藤岡市全域。ハナを含む「つくりもの」はほとんどオッカド(マルデ)で作る。アワボ・ヒエボの他にコンコチとかカツカラボッコといわれるものを作つて神仏に上げたり、多数の木刀を作つて便所にまで上げることが目立つており、十六段菊と呼ばれるハナ・オニノハはこの地域だけのもので、中里村のオンマラサマ、万場町の「水祝い」も、道祖神信仰を考える上で注目されるものである。

二、西毛地方のつくりものの特色

(一) ハナの材料

ハナギは、鳥川・碓氷川流域ではニワトコが多い。鎌川流域ではカズガラを使う例がある。これは甘楽町秋畠や南牧村などが和紙の産地であったことから、晚秋の頃、楮を切って大釜でふかして皮をむいて楮の木をハナギとして使うもので、黄色味をもった独特的の光沢がハナとしてよろこばれた。正月九・十二日の富岡市内のボク市に売りに出したこともある。神流川流域はオッカドで一切を作った。

(二) タワラ

年神棚（神棚）に上げられる。アワ依・ヒエゴはみられず、オッカドを三本または六本、適當な長さでそろえ、皮をむいてしばり、木口に「七・福・神」「七・福・神・金・銀・叶」などと文字を書いて上げ、一年中おいておく。農具は別に上げられる。

(三) アワボ・ヒエボ

ほぼ全城で見られるが、神流川流域のものはやや小さく、中里村の例では堆肥場と畑の両方に立てている。

小さいアワボ・ヒエボといえるのはコンコチ（万場町）・カッカラボッコ（中里村）などと呼ばれ、竹を二つ割りしたものにオッカドの棒を一本（皮つきのものと皮をむいたもの）さして神仏に上げる。上野村や万場村のものでは、一本は皮をむいた棒、一本はハナをかいたもので、薔薇と花（または花と実）という説明がある。

(四) ハナ

鎌川・神流川流域のものは、長い枝を使はず、ある長さで切ったものを八段、十二段に使う。甘楽町のものは、カズガラを蒸す時に長さをきめて切ることからの習慣と考えられるが、神流川流域のものはオッカドの木の性質から長いものが使えないためとみられる。十一段は山の神という話があり、八段一本または十六段は、ジュウロクゼンニチと呼ぶ例もある。十六善神という福神信仰かも知れないが、他地区の「十六バナ」と同じく、蚕神に関連しているようである。

上野村滝上家の「十六バナ」は、オッカドで作ったキクバナを、こまかく割った竹にさして花束のようにしたので、作る例は少ないと云うが、昭和四十年前後に中里村で収集されたトトランギクや、五十年頃製作してもらったハツハナ（何れも県立歴史博物館蔵）と共通するもので、ケズリカケを超えた「つくりもの」として注目されるものである。

(五) 木刀

木刀は全地域で作られていた。名称もキッポウ（倉渕村）・カタナ（安中市）・ワキザシ（中里村）などがあり、ドンドン焼きの火で

こがしたもの在家に持ち帰り、門口にかけて魔除けとするものであるが、神流川流域では、作ったものを神棚・床の間・便所などへ納める。なかでも便所のものは重視され、「一番目に大きなものを上げる」といふ。

道祖神に供えるものは神流川流域では特に大きなものを作るといふ、ねじれた木をみつけ、刀のように若干皮を残し「奉納道祖神」と書いて供える。オキンマラという名称は広くみられ、木刀とともに道祖神信仰の生産・生殖の呪物的な面を示すものであり、中里村のオンマラサマ行事にも連なるものである。

(六) 農 具

オッカドで農具のミニチュアを作つて神に供えることは吾妻地方と西毛地方にみられるが、吾妻地方が釜神に供えたりする面が目立つたが、西毛地方では歲神に供えることが目立つ。作られる農具は、エンガ・テンガが中心であるが、トグワ（唐鋸）・杵を作る例もあり、一部ではクサカキとよぶ除草具も作るが、多くの例が一種類一個作り、水引きまたはひもでしばって、正月飾りの竿にかけて供えている。歲神（または正月様）が作神として考えられているといえよう。

(七) オニノハ

神流川流域、それもサンチユウ（山中）と呼ばれる上野村・中里村・万場町を中心に行はれ、家の入口に飾られるもので、下を尖らせたものと平なもの、二一本の線を引くのと引かないもの、☆形を書くものと鬼と書くものなど、地区や家によってちがいがあるが、家の入口の地面に立てかけて、魔除けとすることでは共通している。

(八) マユダマ

養蚕のさかんな頃は、養蚕農家では五升とか一斗あるいはそれ以上の米の粉（多くはコゴメと呼ぶくず米を粉にしたもの）でマユダマを作つて、ザシキいっぱいに飾つた。マユダマをさして飾ることをズウアゲとかオコサマアゲと呼び（蚕の上糞と同じ）、十六日にはマユネリと呼んでマユダマをゆでて食べ、十七日以降二十日までにマユカキといつてマユダマ外しをした。マユダマは養蚕家の豊蚕の予祝行事と理解されているが、山中では鳥の形や梅の花、イモの形にも見られるホウシユ（宝珠）の玉がさかんに作られた。木型があつてその中へ押しこんで作る例さえあるくらいだが、何で鳥の形が入るのか考へると不思議である。ある家では神棚に供えるマユダマは梅の枝にさす。また他の例ではオンラサマ（蚕神とみられる）には梅の大きな枝にさすから、「梅にウグイス」というが、確かな説明ではない。イヌの形のものを見たという話もあるが確認はできない。おそらく鳥の形のマユダマをイヌと錯覚したのだろうが、いふならば狩猟との関係を考えねばなるまい。万場町の例では、米の粉で作った臼と杵（立杵）をボク（マユダマをさす木）の中心にさ

して飾る（今回の調査では記録されていない）。また、マユからの発展だが、マブシと称する四角なものを作つて飾る例もあるというが、これは二月初午にもみられ、四角に作った箱状の中にマユ形のマユダマを二粒（または四粒）入れてゆでたもので、蚕神さまへの供えものとしている（万場町）。

三、調査家庭の特色

（一）上野村 滝上夏男家

現在リング栽培の篤農家。十六ギクと呼ぶハナツクリは神流川流域の傑作で、他地域に例を見ない。オニノハも珍しいものである。

（二）中里村 高橋富美治家

修驗の流れをうけ、行事を確實にしている。特にワキザシは多く、カユカキ棒は大黒柱にしばりつけて保存している。

（三）万場町 斎藤茂三郎家

確実に伝統を守っている農家。素朴な技法の「つくりもの」の中に「山中」の農家の祈りを見るようである。

（四）藤岡市 關沼円藏家

日野谷とよばれる谷間の「つくりもの」は、オッカドで豪華に飾られ、十六ゼンニチはオッカドの十六バナである。

（五）南牧村 市川太平家

村史「民俗篇」を担当したこともあり、伝承者としても貴重な存在で、「つくりもの」そのものだけでなく、伝承にも珍しいものがある。

（六）下仁田町 神戸国吉家

和紙づくりからこんにゃくに変わり、カズガラもへり、「つくりもの」も変わって、七福神や農具などが中心になった。

（七）下仁田町 斎藤治郎家

ケエダレ（ハナ）はミツバウツギで作り、フク儀の作り方に特色がある。木口に書く文字に農家の願いがこめられている。

（八）甘楽町 浅香英雄家

若い頃、富岡市のボク市へハナ売りに出たこともあり、オオバナ・コバナ・十六バナ・農具などに古い伝統をのこしている。

（九）松井田町 上原富次家

長い教員生活で町へ出ても、伝統の年中行事を守り、毎年町中央公民館に「つくりもの」を作つて展示している。

(十一) 安中市 森泉七四郎家

典型的な養蚕農家で、「つくりもの」は一時中断していたが、近年公民館活動に参加して製作し、伝統を引継ごうと努力している。

(十二) 横名町 里見義市家

里見梨の栽培農家。一時中断したが、孫のために製作したのを機会に調査したもので、ニワトコの木でアワボ・ヒエボを作る。

四、おわりに

調査実施要綱にあるように、本調査は事例」と(特定の個人の家)と)に行われ、製作技術を中心、「小正月のつくりもの」全てにわたって調査し、報告もその趣旨で行われるので、行事や「つくりもの」の性格や意義などについての考察は一切行わない。調査計画にも示されているように四年間にわたる調査があるので、何れかの機会に総括をしたいものと考えている。

(阪本英一)

関沼円蔵家のつくりもの

一、概観

関沼家では、ハナ木やマユダ木を正月一日の「山入り」で切る。マメンブチ（ハナノキ）・ニワトコ・ヌリデンボなどの木を切るが、御幣をつけ、オサゴをまいて拝んだ。

ものづくりは十四日となっているが、マメンブチでカキバナを、ニワトコで十六バナなどを作る。ハナはハナカキガマでカイで作るが、現在では、ニワトコの木の芽をいかし、表面に切れ込みをつけるようにした簡略化されたハナとなっている。

お飾りかえでは、大正月の供え物をはずして、代わりに小正月のお飾りをする。アキの方に向けられたマワリダナのお棚にはカキバナを飾り、その前のタケには、マユダマの木株とその両端にクワ根っこを二株下げる。マユダマの木には、オマイダマをつけ、クワには、マユ・丸玉・小判・ソロバン玉の形のものをさし「十八」としている。

二、山入り

正月一日の仕事始めに「山入り」をする。

恵方（アキの方）の方位にある山へ行く。北西の石谷（石切場）、坊山方面へ出掛けた。

「山入り」の方法は、木の枝をタタで切り落とし（枝落とし）、その枝に、その場で大きな半紙を製いて折り返して作った幣束を付け、吊るす。一つだけを結い付ける。オサゴをまいて、拝んだ。

木を切る時は、ニワトコ・マメンブチ（ハナノキ）・ヌリデンボの木を切るが、枝の横にのびているところを落とす程度である。

運び方は、最近では、自動車で運んでしまう場合が多いが、歩きの場合には、一度も使ったことのない新しいワラナワでまとめて縛り、担いでくる。

切ってきた木は、屋敷稲荷の近くへ置く。カシグネへ立て掛けたり、石垣へおつけておいたりした。供えものは特にしていない。

八日を山の神様を祝う日として、人をよんでも小正月の木の清めをして祝ったこともあった。

三、木の種類

(一) つくりものに使用する木

ハナはマメンブチ、十六バナにはニワトコの木でフシが一本に八段のものを用いる。カユカキ棒やカタナには、ヌリデンボを使っている。

(二) マユダマをさす木

年神のマユダマの木には、クワ(十二)を二つ、オマイダマの木を三つ用いている。マユダマ木の方は、正月一日を過ぎてしまうと、八日過ぎの作る間際に用意するようになる。

ザシキに飾るマユダマの木には、昭和三十九年頃までオオボク(ナラ)を使っていた。(正月十三日には、オクノの将棋盤の上などに置いたオオボクの木の元の所へコンブをかけた)家の外には、オマイダマの木を用いる。

四、作る日・場所・道具

ものつくりの日を「ものつくり」の日と呼んでいる。

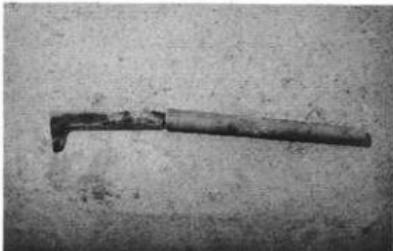
ものつくりの日は正月十四日。午前十時から午後三時頃までに作っている。

作る場所は下の庭先で木をきざんで、エンガワかザシキで作る。

道具には、ハナカキ(ガマ)(写真一・二)の他、ナタ・ノコギリ・カマなどを使用する。(写真三)

台は、特にないが、コッパなどを代用することがある。作ったものを何に入れておくかは、特に決めていない。

「つくりもの」は、作った後、それぞれすぐに納めている。十六



(写真1) ハナカキガマ (自製のもの)



(写真3) ナタ (上) とカマ (下)



(写真2) ハナカキガマ (関沼豊太郎氏蔵)

はキヌガササマへ置く。

五、作り方

(一) ハナの作り方

ニワトコの木の一か所をハナカキでカイテ、木の芽を残すようにする。五・七・十一・十三・と奇数回カク。木の芽は、一芽でも欠けると作るのをやめるという。ニワトコの表皮は、特に剥いていない。現在では、表面に切れ込みをつけるようにした簡略化されたハナとなっている。(写真四・五)

(二) カユカキ棒の作り方

ハナカキとナタを用いて作る。先をナタで四つに十文字にして割り、マユダマをはさむ。削りはつけない。

(三) ハラミバシの作り方

特別なことはないが、暮にナラの木で三十膳位、普段用いるハシを作った。

(四) 肥庭飾りの作り方

現在では作られていない。

昭和三十九年頃まで、コヤシバにヌリデンボで作っていた。テンガ・エンガ・モチツキキネ・カケヤなどの農具のミニチュアやマメンブチのカキバナが六八ほどのタケの枝にさしてあった。数は十六で、そのまま「十六」と呼んでいた。ヌリデンボの皮の剥いたもの、剥かないものが配置よく飾られていたという。関沼氏の祖父の房吉氏が作っていた。農具のおもちゃをよく作っては、近所の子供たちに与えていたという。

(五) コンコチの作り方

特になし、名称だけは聞いたことがある。

(六) オキンマラ(カタナ)の作り方



(写真5) ハナをかく（関沼豊太郎氏）



(写真4) ハナをかく（ニワトコの表皮を切り込む）

カタナは、ニワトコの木で握りの部分に模様のつけられた大小二本を作った。(写真六) ヒゲ(カタナのフサ)はなかったが、削ってつける人もいる。棚の上に供えられる。

(七) 農具の作り方

現在では、特になし。

昭和三十九年まで祖々父房吉氏が作っていたものは、スミでハガネの部分を画いたり、タワラ(三俵)のスジをいれたりしていた。

(八) マユダマの作り方

米の粉だけを使っている。

精米所へ持って行き、挽いてもらつておいて翌日受け取るが、ものづくりの日に間に合うように八日過ぎにしていた。

十六には、ソロバン・コバン・マユ・マユダマの四種類が各四個ずつ付けられる。

マユダマは、ミなどに入れておき、煮る。それをカメノコショウギにあげて、ツユをきってからさしている。

六、飾りかえ・供え方

(一) お飾りかえ

正月十四日に行っている。太正月の供え物をおろして、代わりに小正月のお飾りをする。八日にはマツをさげるが、ナマクヌギのマツグイは残される。マツをはずした後にマユダマが供えられる。

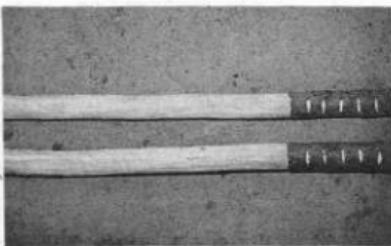
(二) ハナの供え方

神棚へ三本、年神棚のキヌガサマ一、サンボンコウジン一、天照皇太神宮へニワトコの十六を一本(写真七)、その他、仏壇・エビス様・馬屋の神・床の間・便所神・井戸神へ各一(写真八)、門口・屋敷神・灰置場・蚕室前・作業所などへ各一本を供える。

また、馬頭観音(写真九)・庚申様・薬師様・道祖神様・イチツコ様(旅僧の供養碑)などへも供



(写真7) 神棚に供えられたニワトコの十六とハナ



(写真6) カタナ

えた。

(三) 道祖神の祀り方

マユダマとハナのはか、オサゴやオミキを供える。

ドンドン焼きは、正月十四日の朝五時頃、夜が明ける前に、早く起きる鳥が鳴かないうちにと、子供たちが中心となって道祖神様の所で行われる。正月の松飾り・古い御札・ダルマサンなどをひとつころへ寄せて燃やす。マツのモエックジキの黒いものを持ち帰り、家の門口の石の上へ置いておくともらい火、火事にならないという。

また、オタキアゲのケムリにあたると一年間無病息災で過ごせるといい、その場で「道祖神ゴハン」(オミゴク)を食べる。

オミゴクには、ゴボウ・ニンジン・ミョウガ・シイタケ・コンニャク・チクワ・アブラアゲなどをぎざみ、油でいって砂糖としょうゆとを御飯に混ぜる。これで正月ズシを作り、重箱によせて道祖神へ供える。年長(中学二年)の子供の家で作ることになっている。

(四) フク儀

現在では、特になし。

祖々父房吉氏の作ったタワラ(三俵)は、ニワトコの皮を剥かないで、アサのヒモで縛ったものだった。スジをハナカキでつけていた。子供たちが奪い合いになるほど、おもちゃとして使われていたという。

(五) 肥庭飾りの供え方

ヨツゴで暮のうちに堆肥場へコヤシを寄せておくが、仕上げてから飾りを持っていた。

(六) 農具の供え方

正月様へ、コヤシ場のものと同様に作り、供えていた。正月棚へのお供えの方がやや大きかった。自分の取りやすい向きに供えたが、タワラはなかった。



(写真9) 馬頭観音へマユダマ・ハナを供える



(写真8) マツツケに飾られたハナ

(七) マユダマの供え方・飾り方



(写真10) マユダマの木にはマユダマを、クワ根っこには、マユ・丸玉・小判・ソロバン玉の形のもので飾られる。

年神棚や神棚へは、ハナと同様にして供える。キヌガサ様へもハナとマユダマとをしている。

お棚（マワリダナ）にはカキバナを飾るが（写真十）、お棚の前の竹（前飾り）には、赤いマユダマの木三株と、その両端にはクワのカブツを二株下げる。（写真

十一）マユダマの木にはマユダマを、クワ根っこには、マユ・丸玉・小判・ソロバン玉の形のものを付ける。

七、小正月行事とのかかわり

(一) 十五日粥とつくりもの

カユカキ棒で右まわしにかき回し、三回目にすくい上げる。最初がワセ、次がナカ、最後をオクとし、三度とも三回目にすくい上げる。カユがたくさんすくいあがると豊作になるといい、一番あつたものを作った。



(写真12) オソウゼンサマ（大正月）



(写真13) オソウゼンサマ（小正月）

「アブラオーンケン」と三回唱える。その後は、お盆などにのせ、オソウゼンサマ（ものつくりの神様・作神様で、コクベヤにナマクヌギの板七枚で台を作り、ホソナワでつなぐ。ムスピにウメ・マツをつける。十二月



(写真11) お棚と前飾り

三十日に行われ、ウドンかごはんを進ぜるが、卯の日まであげていた。卯の日を越えないと正月様があがらないという。卯の日に下りて卯の日にあがるともいう。(写真十二・十三)の棚につす。その後で半紙につつむ。(写真十四)

四月末、イネのナマエをたてる時に、水口にカユカキ棒をさしておいた。悪水が入らないようにするためという。

カユを吹いて食べてはいけないとされ、吹くと風にあいやすい、田植えの際ナエが浮いてしまうなどといふ。

ハラミバシは、特に作らないが、普段からのハシはこしらえた。正月棚へも、ヤマの木を使つたもので毎日新しいハシを供えた。クヌギのマツグイに切ったウラの枝を切つて用いた。

(十二月)二十五日がマツムカエの日となっている。二十八日がモチツキ、三十一日にかけてまわり棚のオカザリをする。棚はヒノキの枝で、年神様をまつり、アキの方(恵方)に神棚を向ける。)

後は、大飾りなどと一緒にして、物置きや収納へ置いておいた。

(二) 十六日の行事とつくりもの

朝夕二回、白い御飯やウドンをマツグイのうつてある所へ供えた。四角の重箱の小さいものに入れた。

十六日の墓参りは特にないが、元日には主人が西平井の清見寺へお寺(墓)参りをする。

また、十六日にはウマゴイ(馬屋肥)をとった。汲み取りは墓のうちにすませておく。コヤシバからは男衆が堆肥を出し、冬の間に桑原へ入れておいた。リヤカートを使つたり、タケのタイヒカゴをテンブンにして運搬していた。

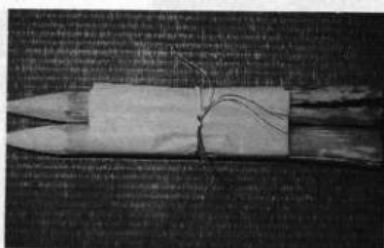
(三) 成り木實め

ナリクダモノ(モモ・カキ・ウメなど)の木の元へ残り水を捨てた。

(四) 蛇・ムカデ除けにマユダマのゆで汁をまいたか

正月十四日に屋敷まわりを右まわりに一回りする。ヤカンに入れたり、バケツにヒシャクでゆで汁をまいたりした。

(五) マユカキ



(写真14) カユカキ棒

正月十七日の朝からマユダマをとり（マユカキという）、全部糸に入れている。

（六）小正月の供えもの・飾りものの片づけ

正月二十日を「二十日正月」とい、タナオロシをする。二十八日は、シマイ正月で、マツのクイヌキを行う。

二十日正月には、イワシをシンにしてコンブマキをこしらえ、太正月のお供えを手で割り、一緒にオイベスコウをし進ぜる。

十六とオマイダマと大正月のカガミモチを大きな入り物に入れてアサエビスとする。（写真十五）オツユの中へ入れたオソウニにしてあげる。夕方は、ケンチン（ケンチヨン）、カシラツキとコブマキ、御飯とする。

ツルベのナワやショイナワは、正月二十日に新しいワラで作つた。村中の男達による「ハヨブチ」が朝から行われた。でき上るとハリのところへ上げておき、用意しておいた。うち一本は、二十一日替えた。昭和三十五年頃までやっていた。あまるど、田植きのマンガナワなどにした。）

（七）つくりものの最終的処分

ハナなどは、物置きなどへ置き、三月頃ミソをたく時に一斗ガマで豆を煮る際に燃やしてしまう。

カタナは、子供のおもちゃとなつた。

大飾りのワラは、ナエを束ねる際にも使つた。

一月初午には、マユの形のマユダマを一升マスに二つしらうる。ワラを十文字にして敷き、ワラの高さだけマユダマを積み上げる（マブシアゲ）。それを奥の間の机へ置く。一日だけで夕方にはさげてしまう。砂糖じょうゆで食べる。

スヤキのキヌガササマの像（二十一・〇×九・五センチメートル）があるが、クワとタネを持った姿で、慶応頃のものという。

（今回の「小正月のつくりもの」調査にあたつては、関沼いね氏、関沼ヒサエ氏、関沼豊太郎氏の協力を得られたことを付記しておきたい。）



（写真15）エビス様への供え物

森泉七四郎家のつくりもの

一、概観

安中市鷺宮の金平居は小金久保・下平・居内の小字が集まつた六〇戸ほどの集落である。

南は富岡市境に近く、北はJR信越線、国道十八号線と碓氷川が並行して走つてゐる小高い台地状の上に森泉家はある。

小正月行事は昔からみると変化が大きく、森泉家を中心と正月行事をみると、昔は、どこの家でも座敷に七・五・三の飾りを張りめぐらし、女性は、この中に入れないほど、きびしい家例があった。なお、臼にも飾りを行い、「小正月のつくりもの」にフク依をはじめ各種のものが多く作られたが、現在は消滅に近い。しかし、その中で、ドンドン焼きは子供会などが中心で復活している。正月行事の一端を日を追つてみる。

○松迎えートリの日を選び、一夜飾りせず。

○十二月八日「オコトゼック」。

○正月一日一高崎の清水觀音参り。

○四日一嫁さん、坊さんの年始。

○七日一正月飾りのコブ・カキとセリを入れた七草粥。

○十一日一食開き、さく切り、ものづくり。

○十二日一正月と小正月の入れかわり。

○十三日一ワカキ餅・マルメドシ。

○十四日一ポンブしめし・ドンドン焼き。

○十五日一マユダマカキ・鬼の首もゆるす。

○十六日一イトリといいマユダマを食べる。鬼の首もゆるす。

二、山入り

初山入りは「六日山」とい正月の六日と決まっている。山の方向は、その年によって異なった。しかし、鬼門はさけた。

山の神に供えるものはオカシラツキを「匹」と紙に包んだオサゴであった。なお、オンベロは手で作り木の枝に吊るし、拝んでから切り始めた。切り方は別に決まっていない。切る木はヤマクワ（ヤマボウシ）・エゴ（一年木）・ナラの木である。

これらの木をフジの根で束ねて担いで来る。家に持ち帰ってからは庭の隅の不淨でないところに置き、オサゴ（米）を紙に包んで供えておく。

三、木の種類

(一) 「つくりもの」に使用する木

昔からハナにはハギの木が使われた。この木はハダが美しく、なかでも黄色のものがよいとされている。「つくりもの」には、昔、ヌルデ（ヌルデンボウとも呼んだ）の木を使った。この木は修験が護魔をたく木である。しかし、環境の変化で、この木が得られない状態となり、昭和初期頃から秋畠方面より売りに来たが、次第に「つくりもの」をさす家が少なくなり、来なくなってしまった。

(二) マユダマをさす木

ナラの木を使っている。年神様・オシラ様・座敷の神々は全て、この木にマユダマをさして供えている。ただ、年によっては年神様にのみヤマクワ（ヤマボウシ）を使うこともあった。この木はナラよりきれいであるという理由からであった。

ナラの木も枝振りのよいものを選んで、マユダマをさして飾る。

四、作る日・場所・道具

ものづくりの日を「モノソクリの日」と呼んでいる。正月の十一日と決まっていた。作る場所は特に決まっていないが、大体縁側である。(写真十八)

道具はノコ・ナタ・キリなどである。(写真十七) 別に決まった道具でなく、細工の出来るものなら何でもよいとされる。「つくりもの」の台は板を使用する。これも別に決まったものではない。



(写真16)

作ったものは席の上に半紙を敷いて、その上にのせて、これを床の間に置く。

五、作り方

(一) ハナの作り方

ハギの木を材料として一段のハナを作る。数は大体十五本から二十本ぐらいである。ただ、十二段のハナは床の間用として作る。

昔はハナを売りに甘樂方面の人が来たので買つこともあった。

(二) カユカキ棒の作り方

ヌルデの木を材料として二本を一组として作る。形は下部を杭状に削り、上部は四ヶ割りに、十文字の中心に、マユダマをさし込んで仕上がりとなる。(写真十八) ただ、杭状の中央部に皮つきの二本の横線を作る。別に削りカケはない。仕上げたものは二本と一緒に半紙で包み、その上を水引きで結んで置く。

(三) ハラミバシの作り方

材料はヌルデの木を使用する。この木を細かく割って、両端を削り、普通の箸より、やや太く、中央部は特に太くする。数は家の人数分を作る。この形は福の穗を表わすといわれている。(写真十九)

(四) フク俵の作り方

現在は作られていないが近くの新井家では作る。

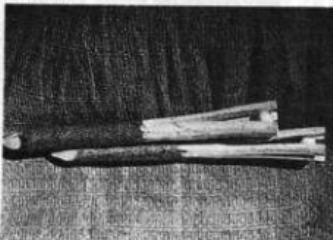
(五) アーボ・ヒーボの作り方

ヌルデの木を材料として作る。長さは十七センチメートルで、皮つきが稗を、皮なしが米を、半分皮つきが麦を表わしている。

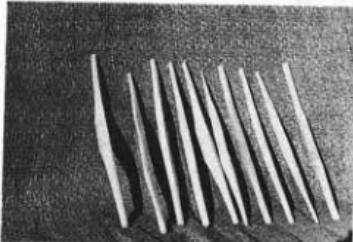
(六) カタナの作り方



(写真17)



(写真18)



(写真19)

ヌルデの木を材料として大小の一本を作る。大きい方は長さ一メートル、小さい方は三十二センチメートル程度のもので、大きい方は太いものを、他は細かいものとする。根元の方をつかとすると、いくらか反りのある材を使用する。なお、刀身にあたる部分には、皮をはいたものを巻きつけておく。(写真二十)

(七) 農具の作り方

ヌルデの木を材料としてエンガ・テンガ・キネなどを作る。(写真二十一) 大きさは、その年々で一定していない。作る道具も別に決まっていない。

昔は、作る種類が多く、マンガ・カマ・クマデなど全ての農具を作った。時間のゆとりもあったので細かい細工を施したものに仕上げた。

(八) マユダマの作り方

昔の材料はアワ・キビを原料として粉にしたものを使用した。特に田の用水不足のときはキビのみで、マユダマを作っている。

昔通はアエゴメといい、くず米を材料として作る。粉は十二日まで挽き、マユダマを作る。この日のことを「マルメドシ」と呼んでいる。ゆで方・ふかし方は、粉を木鉢の中で、熱湯を注ぎ、こね合せる。煮たマユダマは、ショウギに入れ、さめたところで箸に入れる。形は丸型のものを沢山作り、マユ型のものは十六個作る。マユ型というのは中央の部分に、くびれを入れたものである。

マユダマの木はナラの木で、昔は座敷に大きな枝を立てておいて、さして飾った。

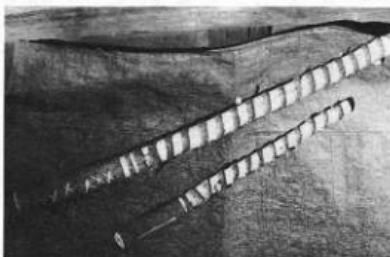
神棚の前には別に一メートルからの枝を使つて飾った。

現在は大黒柱に竹を結びつけて、その枝にマユ型のものをさして飾る。(写真一)

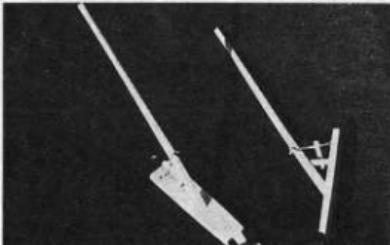
(十二) 神棚の方は丸型のものを、昔とほぼ同じように飾る。



(写真22)



(写真20)



(写真21)

六、お飾りかえ

飾りかえは正月十三日の朝行う。

(一) ハナの供え方

一段のハナを神棚・年神棚・大黒柱に供える。これは他のハナより念入りによく作つた。そのほかに供えるところは、仏壇・えび様・釜神・馬屋神(觀音様)・床の間・便所神・玄関・門口・屋敷稻荷・土蔵・堆肥舎・井戸神・オシラ様(神棚)・道祖神(辻にある)と墓地である。なお、墓地は墓標毎に一本ずつ供える。家の中の各所には、マユダマも一緒に飾る。

(二) 道祖神の祀り方

マユダマをさした枝を天道柱(座敷前縁側)に結びつけておき(十三日の朝)、十四日の朝、これを取りドンドン焼くに持つて行く。

ドンドン焼きのやり方は神棚のオカオカクシや松と一緒に持ち寄って燃す。この時にタチを持つて行き、ドンドン焼きの火を使い、この先を燒いて、また家に持ち帰り、玄関の外側のところに大小二本を飾って置く。(写真一十三)

(三) 肥庭飾りの供え方

水田を作らなかった時代はアーボ・ヒエボを必ず作つて、どこの家でも飾っていた。

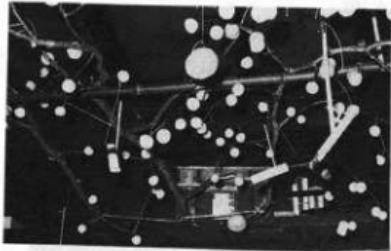
これは堆肥の上に立てて飾る。竹の枝に、マユダマと米・麦・ヒエを形どった「つくりもの」をさしたものである。数は別に決まっていなかった。

(四) 農具の「つくりもの」の供え方

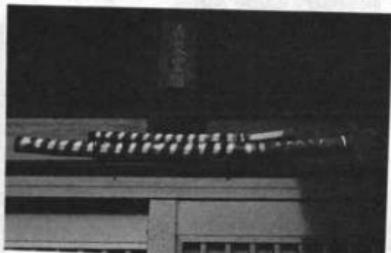
「つくりもの」のエンガを水引きで結び、マユダマを飾った枝に吊るし、神棚の前に飾った。(写真二十四)これについてのいわれは不明である。

七、小正月行事とのかかわり

オシラマチは別に行っていない。しかし三月十五日にキヌガサショウジンといい蚕神を祀る。そ



(写真24) 向って右はエンガ



(写真23)

の際は混ぜてはんを供える。

正月十五日の十五日粥にカユカキ棒を使い、一本を一緒にして、粥の中をつきながら、「麦はどうでしょうか（古い）、春蚕はどうでしようか、稻はどうでしょうか……」というように唱え、そのときの粥が、カユカキ棒にどの位つくかで、七分作とか、八分作とかと判断し「豊作をお願いします」と念じて終りとする。その後カユカキ棒は神棚に供えておく。

ハラミ箸は家中の者が、この箸で粥を食べるが、その後は、まとめておき、適当の時期に燃してしまつ。別に田や畑にさすようなことはしない。

十五日の行事で、大正中頃まではトリオイということが行なわれた。それは、畑の中央に竹の竿を立て、その先端にメケエ（カゴの一種）をかぶせたり、そこから四方八方に網を張ることであった。

十六日にはイトトリといい、十五日の午後に、マユダマ飾りを取ったものを、ゆでて何にも味つけしないで食べる。

その他にカカン立てや墓参りの行事はなかったと伝える。

馬屋肥は正月の初午に出すと決まっており、この肥出しい人は、特別にぞう煮を作つて食べさせるが、小正月との関係は、よくわからぬ。

二十日正月ぎに来るお客様のいちそには、必ず小正月飾りのマユダマを入れて出すことになつてゐた。また、ヤマコナシといい共同山（共同所有の山の意）の薪を取る作業の際も、必ず、小正月のマユダマを焼いて食べてから出掛けることになつてゐた。

小正月の供えるもの、飾りものは十五日のマユダマをかく際に一緒に片づける。

ハナは道祖神へ持つて行き、カタナは魔除けとして玄関に一年中飾つておく。

（阿部 孝）

里見又市家のつくりもの

一、概観

里見家は榛名町下里見にある。五〇戸ほどの集落で、古くからの姓は主に里見・中島・中曾根・富沢・赤尾などであって、歴史的に由緒ある地域である。

小正月行事は当家などをはじめ、ほとんどの家で固く行なわれ、「つくりもの」なども作られていたが、材料を得るのが困難となり、次第に簡略化され、ついに消滅状態になった。

同じくドンドン焼きの行事そのものは続いて来たが、道祖神小屋作りについて学校関係者より廃止の処置が出され一時中断されてしまったが、近年になり子供会関係者により教育的価値が唱えられ復活となつた。ただ、かつては男子のみの参加であったが女子の参加も認められるようになった。

里見家にはオシリヨウ様（先祖神）が祀られており（写真二十五）、小正月行事とも関わりがある。なお、太正月にヤナギの箸を家族が使用したり神々に供える際に使用するという珍しい家例が伝わっている。

二、山入り

「山入り」の日は正月六日と決まっていた。行く山は同家の前方にある里見山である。その際持つて行くものは餅・オカシラツキである。山に行き、まず半紙を手でさして御幣を作り、木に結びつける。そこで品々を供え山の神を祀つてから木を切りはじめめる。木の切り方は別に決まっていない。切る木はヤマクワ・ナラ・ヌルデ・コメゴメ・ハギの木である。これらの木は束ねて担いで来る。家に持ち帰ってオシリヨウ様の前に、たてかけておく。そこで、まず供えるものはオサゴ（洗米）とオカシラツキである。



(写真25)

三、木の種類

「つくりもの」に使用する木のうち、ハナに用いる木はコメゴメとハギの木である。コメゴメの木で作ったハナは家の内の神々に供えるものでハギの木のものは家の外の辻や墓地などの神仏に供えるものである。

「つくりもの」に使用する木は細工がしやすく、簡単に割ることの出来るヌルデの木を使用する。マユダマをさして飾るためにヤマクワの木を使うが、この木がないときはナラの木を用いる。年神には出来るだけヤマクワの木を使用するように努める。ナラの木はヤマクワの不足を補うものである。

四、作る日・場所・道具

ものつくりの日を「オクワグダテの日」といっている。この日は正月十一日で畠に、さくを切つて中央に御幣を立て、餅を供えることも行っている。

ものつくりは座敷で新しいむしろを敷いてその上で行う。(写真二十六)

その際に使用する道具はハナカキナタ(単にハナカキと呼ぶ)・竹割りチタ・ノコ・ナタ・センティなどを使用する。ハナカキナタ以外は普段使用している道具である。

このとき用いる台はヘイソク(御幣)を切る板を使うようになっている。

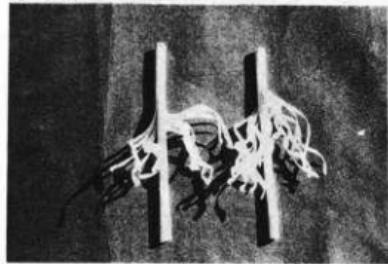
作ったものは裏に入れておく。この箕は十三夜・十五夜にも供え物を入れる。

「つくりもの」は、その日にうちに各所に配る。

五、ものつくり

(一) ハナの作り方

ハギの木の直径一センチメートル位の太さのものを使い、長さ二十一～二十一センチメートル位に切り、ハナを作る。(写真二十七) この上の部分に一、三センチの切り込みを七つつけて一段の



(写真27)



(写真26)

ハナとする。

次に、長さ四十五センチメートルのものに十六段の切り込みを作る。この切り込みの数は決まっていないがなるべく多くの数とする。これを一本作る。(写真二十八) 道具はハナカキタナ・ノコなど。

(二) カユカキ棒の作り方

マルデの木の長さ三十九センチメートル位、直径三センチメートル位のものを用い、上部に十文字の割り込みを入れ、下部は杭状にしたものを作り、皮は全部削り、剥ぎとったものとする。

(三) ハラミバシの作り方

マルデの木を普通の箸の長さに輪切りにして、これを出来るだけ薄くなるように、たて割りとしたものを使い箸を作る。(写真二十九) ただ、中央部分を太く、両端を細かくしたものとする。数は家族の人数分か、または十二組と、いずれかにすることに決まっていた。

(四) アーボ・ヒエボの作り方

竹の枝の先に、マルデの木を適当な長さに輪切りにして、皮を削り取ったものを、そして作る。マルデの木には別に切り込みやハナのようなものはつけない。これをアーボ・ヒエボと呼んでいる。

(五) カタナの作り方

マルデの木を使い大小二本のカタナといふものを作る。長さは一尺二寸と決まっている。(写真三十)

昔のことは不明で、ドンドン焼きに持つとか、玄関に飾ることは行っていない。作ったカタナは神棚に供えて置く



(写真29)



(写真30)



(写真28)

ことにしている。

(六) マユダマ作り方

粉は米のサンゴメ（一番ゴメともいう）を使う。色は黒いが、やわらかで、美味である。

粉挽きは正月になって精米所で「御年頭」といい、無料で昔は挽いてくれた。マユダマを作る日は十日の晩で、こねばちを使い、熱湯でかいてねって作る。

昔は粉一斗ぐらいを使って大量に作った。マユダマの大きさは直径三・五センチメートル位のものを多數作り、箕に入れて風に合せないようにしておく。

別に直径四センチメートルくらいの大きいものもをジユウロクといい十六個作る。これは大黒柱のところに飾るものである。（写真三十一）

マユダマの木はヤマクワの木か、ナラの木を使う。

六、飾りかえ・供え方

飾りかえは正月十三日に行う。

神棚にヤマクワにマユダマを十五〜二十個さしたものを二本、ハナを供える。なお、オカラケにマユネリを二個のせて供える。年神は神棚にある。（写真三十二）

仏壇・稻荷様・金神様・えびす様・荒神様・牛小屋には、それぞれ、三叉の小枝（ヤマクワかナラ）に三個のマユダマをさし、ハナと一緒に供える。神棚と同じくマユネリも供える。

昔は桑の木の三叉のものを使用していた。

昔の座敷飾りは蚕があたるようにと石臼を置き、上玉の穴を利用して、マユダマを飾った。

現在は大黒柱に飾りつけをしている。

便所神には家族の人数分のマユダマをさしてハナと一緒に飾る。一年中「しもの病にからぬ



(写真32)



(写真31)

よう」と願う。

なお、屋敷稻荷が氏神の八幡様になり、四軒で一棟の稻荷を祀っている。その社は四つに区切ってあるので、そこにも同様に供える。その外は井戸神様、オシリヨウ様（別名 ヤブノカミサマ）という道祖神にも同じである。

道祖神の祀り方は正月様に供えものをした際に用いた半紙を組み合せて、それに「奉納道祖神大笑」と墨で書いた長いものをドンドン焼き小屋の竹竿の先端に結びつける。

ドンドン焼きのやり方は正月七日に松引きをして、その外に各戸からワラ一束、なわ一房、薪一・三本と竹のある家から十五・六本位大きい長いものを出してもらい、子供会で、これらを材料としてドンドン焼き小屋を作る。

竹を柱として円すい型の小屋を仕上げる。（写真三十三）

子供会の親方の家の前に腰泊る。大人のことはオオゾウ、子供のことはゴゾウ

と呼ぶ。十五日（昔は十四日）の朝早くからリヤカーに太鼓をのせて大声で「道

祖神が燃えますよ、猫もしゃくしも皆起きろ」と唱えながらムラの中を歩く。ムラの人たちが集まり、朝日の出る前に火が放たれる。ただ、小さい小屋に火をつけてから、ドンドン焼き小屋につけられる。

肥庭飾りの供え方は堆肥の中央に竹の枝にアーボ・ヒエボをさしたものをして立てる。別に何様ともいわず昔から立てていた。堆肥は一応暮に切りかえしておいた。正月八日にはヨウカ（八日）ダメといって、下肥を汲み出すことに昔はなっていた。フクイの話は聞いたことはない。

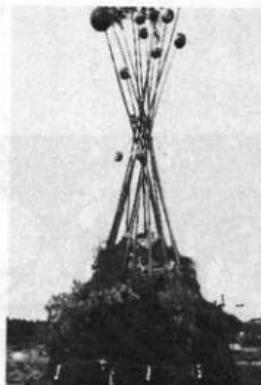
農具の「つくりもの」は作らない。

七、小正月行事とのかかわり

十五日の十五日粥を作るまでカユカキ棒は神棚に置き、その時降して箸を持つような要領で持ち粥をつき回す。（写真三十四）唱えごとに供えではない。そのあとはカユカキ棒一本と一緒に半紙で



（写真34）



（写真33）

包み水引きでむすんで神棚に納めておく。

ハラミ著を使い家中の者が十五日粥を食べる。すんだあとは洗っておき、十七日の朝のマユネリの行事に再度使用する。別に苗代には使わなかった。

「マユダマカキ」をしたあの木の枝は東ねて、オシリヨウ様のところに置く。その後時期をみて燃してしまう。なお、十六日にオシリヨウ様にお参りをしたこともあった。

「マユダマカキ」は十五日の朝行つた。この時の入れものは一斗桶である。

八、おわりに

当家は長年の間小正月の行事をほとんど行わない状態であったが、昭和六十一年に又市氏が孫に行事を教えるために復活して、「つくりもの」などを作りはじめた。従つて昔のものとの異なる点や思い違いのあったことは否めない。

(阿部 孝)

斎藤茂三郎家のつくりもの

一、概 観

斎藤家の山入りは、元日の朝と決められていた。木を切ることをハヤスといい、オッカドハヤシを行った。切られた木は、束にしてフジツルで縛り、「ものづくり」の日まで玄関口に立て掛けられる。ニワトコの木でハナをかいだこともあったが、現在は見られない。しかし、ウメ・カシ・ヤマツツジなどのエダを用いたマユグマ木の多様さと、鳥や宝珠、木型によって作られるミョウガ・タチバナ・ウメなどのマユグマには、はなやかさが感じられる。

また、アーボヒーボやカタナには、神仏に供えられる小形のものも多数作られており、「つくりもの」としての特性が見受けられる。

二、山 入り

「山入り」は、元日の日のアサッパカ（朝仕事、朝飯前）に行ってくる。事前によい木を見つけておいて朝早く出掛けたが、元日は他の人の山の木でも切ってかまわなかつた。

切るという言葉はあまり使わず、ハヤスという。この日はオッカドハヤシであり、十一月十三日はマツハヤシといわれる。モチをハヤスと言つたこともあつた。

山は一キロメートルほど歩いた井戸向いの山へ行つた。（写真三十五）大久保方面へも出掛けたことがある。

「山入り」の方法は、オサゴを紙に包んで持つて行くが、その紙をオシメのようにして木の枝に結び、オサゴは三回くまいまいた。御幣を持って立てる」ともあつた。

斎藤氏は七才の時から父親に連れられて山へ入っていたという。



（写真35）井戸向いの山からの景観

切る木はオッカド（ヌルデ）で（写真三十六）、中里ではカチギと呼んでいる所がある。運び方は、束にしてフジツルで二とこマルく。それをセーコ（シヨイコ）で運ぶ。十五～六貫運べた。束は横では邪魔になるのでたてた状態で背負った。

家へ持ち帰ってからは、正月一日から十三日まで、玄関口に立て掛けで飾つておく。フジツル（クズ、マフジのツル）で縛る。（写真三十七）

木の太いものは周囲にし、中央に細いものを二尺ほど上にのばした。七～十本くらいを出した。全体で三尺（一メートル）ほどになった。家の男衆の数の分だけ束ができた（三人男衆がいれば三束）。マツをハヤシテ（切って）きた場合にはオサゴを供えたが、小正月の木の場合はない。

マツは、暮までしなひないように家の裏の日陰に置かれた。

三、木の種類

（一）つくりものに使用する木

オッカド（ヌルデ）の木を主に使用する。

ニワトコの木でハナ（径一～二・五センチメートル）をかき、カシの枝に十五～六さした。（写真三十八）ザシキのかもいに一か所取り付け、飾りとした。茂平次氏（祖父、慶應頃の生れ）が昭和初期頃まで作っていた。赤・黄などの色を吹き付け、キクのハナのようだったという。

また、一年中クサがはえないようにと、タケ製の灰力キを作り、イロリをきれいにしていたこともある。

（二）マユダマをさす木

山入の時とは異なり、一月十一日頃、二、三百メートルほど入った近くから



(写真38) ハナ (黒沢公一氏製作・復元) (写真37) 玄関口に立て掛けられたオッカドの束



(写真36) オッカドの自生地

探ってきた。

年神のマユダマの木には、カシのエダを用い、ハナやタマ状のものをさした。また、ヤマツツジ（ボク）には、マユダマや宝珠の形のものが飾られた。神棚ではウメの枝が用いられた。

オシラ様のマユダマの木には、ダルマサマのところにウメが使われた。ザンキには、ツツジの枝に鳥（ウグイスやスズメか）が、カシには、型で作られたハナや宝珠のタマが飾られた。（写真三十九・四十）以前は、ツツジは神棚の下に置かれ、カシはミヤ（コ）バシラ、ネマのところの柱に縛り付けられた。また、玄関には、マルとマユのマユダマがウメの木に、仏壇や便所にもウメが用いられた。

四、作る日・場所・道具

ものづくりの日を「ものづくり」という。正月十三日に行っている。

作る場所は、庭先でムシロを敷いて作る。道具には、ナタ・ノコギリ・カマ・ハナカキ（鍛冶屋からもとめたもの）などを用いる。台には、オッカドの木の太いものを使う。塩沢ではキネを台にして木を割つこともある。

作ったものは、ミに入れて神棚の下に置いておく。「つくりもの」を置いておくところは、特に決めていない。

五、作り方

(一) ハナの作り方

ハナカキを用い、キクのハナのようにして作り、カシの枝の先にさした。

(二) カユカキ棒の作り方

カマでオッカドの皮だけを剥いて先を十文字に割り（写真四十一）、十五日の朝のマユダマが入るようにする。一本をオッカドの皮で、



(写真40) トリ・ハナ・マユダマ



(写真39) ツツジとカシのマユダマ
飾り



(写真44) カマで皮を剥ぎ、カタナを作る。



(写真41) カユカキ棒の先端を削る。



(写真42) ハラミバシを削る。



(写真43) 多数のアーボヘーボを作る。

二か所縛る。削りは付けない。

(三) ハラミバシの作り方

ナタでオッカドの木を割り、カマで削って作る。(写真四十二) 家の人数分と神棚へ一膳を作る。カチギとも呼ばれ、勝負ごとの時などこのハシを使うとよいという。

(四) フク猿の作り方

オッカドをノコギリで切り、三本タワラを作るが、皮は剥かない。タワラはフジツツルで縛る。切り口に七・福・神と書く人もいる。

(五) 肥庭飾りの作り方

オッカドの皮を剥いたもの、剥かないもの一本ずつを曲げた割りダケの先に付ける。(写真四十三)

三〜四十年前まで、外馬屋で堆肥舎があったので、オッカドの皮を剥いたもの剥かないもの半々くらいを作り、タケの先にさした。アーボヘーボといい、カマとノコギリを用いた。

(六) オキンマラ(カタナ)の作り方

カタナは、カマで皮を剥いて作る(写真四十四)。オッカドの皮を長く一本残し、それをひとつ



(写真46) できあがった「つくりもの」。たくさんのカタ (写真45) カナヤマサマに供えられたカタナ。



（写真46）できあがった「つくりもの」。たくさんのかた（カタナ）が並んで置かれている。（写真45）カナヤマサマに供えられたカタナ。

（写真45）カナヤマサマに供えられたカタナ。

結びして飾りとする。玄関・便所・作業場前・カナヤマサマ（祖父茂平次氏の先代が鍛冶屋）（写真四十五）へ一本ずつ供えた。

これとは別にカタナの大小二本をオカッカドで作り、剥いた皮で二か所を縛る。（写真四十六）神棚（オイベス・オシラサマ・ダイジングウ）、コウジンサマ（オカッテガミサマ）の仏壇へこれを供える。

正月十三日のモノツクリの日に、オカッカドの木でツバを付けたカタナを子供たちが作つた。ツカの部分は皮を剥かず、十文字の模様を入れた。柄本と塩沢川（万場の字八幡）で子供たちが麦畠の中でけんかをした。屋根へ石を投げて塩沢川でてこい。』といってけんかが始まつた。昭和三十三、四年頃まで恒例のものだったという。

（七）農具の作り方

ナタ、カマなどを用いて作り、刃先などはスミでねつた。

（写真四十七）クワ・エグワ・キネ・トウグワ・ウスなど農具のマネをし（写真四十八）、正月棚（マワシダナ）の下にさしておいた。マワシダナは、昭和三十年くらいまで、アキの方の反対をフサガリの守りとして棚の位置方向を決めた。

（八）マユダマの作り方

今はコメの粉を使うが、昭和三十年頃まではモロコシの粉も用いられた。型で作るハナは、以前からコメの粉だけ



(写真48) できあがったタワラと農具類。



(写真47) エグワの刃部を黒くぬる。

だった。

マユダマの木型は三つで、ミョウガ（八・一×七・五×一・〇センチメートル）、タチバナ（八・一×八・一×一・〇センチメートル）、ウメ（九・〇×七・二×一・五センチメートル）がある。
(写真四十九) 美六（よしろく・明治十五年生れ、先龍（千手寺池田先龍和尚）の刻名が背面に残されている。

粉はウスで挽いていたが、日は決まってはいなかつた。今は、粉を貰つてきている。

昭和四十年頃まで、三十軒くらいが共有の共同水車があつた（下組）。暮れの一日、それぞれ使える日が決まつていて、そこで粉を挽いていたことがあつた。当時、万場に四か所、墨田にも二か所水車があつた。

マユダマツクリ、オカイコの日などといつて、正月十四日の朝、女衆がフロに入つてから作り始めた。うででから、木鉢でこねて（デッチル）、それから木型に入れた。今は、型に押してからうででいる。アブラゲを木型につけたり、手にねりつけたりしてマユダマが付着するのをさけた。

作られたマユダマは、オゼンやオボンのようなものに並べられた。

六、飾りかえ・供え方

飾りかえは、正月十四日の晩で、十四日取りといい、神棚にウメのエダのマユダマが飾られ、飾りが一番にぎやかな状況となる。十

五日朝には、オカユをあげてから外のマツも取られた。マツクリ木を取るのは二十日となる。

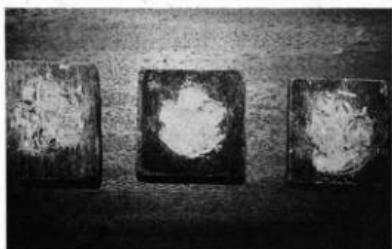
(一) ハナの供え方

カシの枝に十五、六個のニワトコをカイで作ったハナをさし、ザシキのかもいに取り付け、飾りとしたことがある。茂平次氏（祖父）

が昭和初期頃まで作り、供えていた。

(二) 道祖神の祀り方

特がないが、ドンド焼きは、塩沢や相原では昭和初期まで正月十四日晚（アマリマツ）と十五日（ヤシタマツ）を用いて行つてい



(写真49) マユダマの木型。ウメ・タチバナ・ミョウガ。

た。青梨では、アオダケを持って行き、それに火をつけて家まで持ち帰り、神棚のあかりとした。

現在では、小平と塙沢とで十四日の晩、アオダケをシンにして麦ワラだけを燃やしている。

柏木では、マユダマとカタナをそれぞれ一本ずつ持つて行き、まっ黒く焼いて玄関入口の上に飾り、魔除けとする。新しいものをもち、古いものは燃やす。焼いたマユダマを食べると力を使ひかないといふ。

(三) 水祝い

特にないが、小平では、青年団により正月十四日「オンマラ祭」が行われている。ヌルデの木で御神体（オンマラサマ）を作り、若者たちが新婚の家にかつき込むもの。子孫繁榮や家内安全を願う行事。

(四) フク俵

オイベスママ（エビスダイコク）へ供え、一年間飾った後、カマドで燃やす。

一日初午には特に用いない。初午の朝には、マツをいぶすが、オカイコガミサマがケムリにのってやってくるという。

(五) 肥庭飾りの供え方

三、四十年前までは、外馬屋の堆肥舎の積み上げた堆肥のところにアーボヘーボを供えた。

家の入口・屋敷神さま・稻荷神社などへは、それぞれヌルデの皮を剥いたもの剥かないもの一本ずつ割りダケに付けてさしている。三十分くらいは作っておく必要があるといふ。

(六) 農具のつくりものの供え方

昭和三十年くらいまでは、正月棚（マワシダナ）の下に、二本のシノのさしこみの棧があり、そこへ「つくりもの」の農具などをさしておけた。

正月様に供え、その年使う道具を用意することを意味する。

また、部落を御年始にまわってきた際、新しくこしらえて揃えた実物の農具や鞍などをダイドコロへ置いて皆に見せた。丹精を見せるために、マキゴヤをいっぱいにしておかないとはずかしかったという。ワラジなどもたくさん作っておいた。

(七) マユダマの供え方・飾り方

神棚へは、左右二本のウメの枝にマユダマをさしている。

ザシキには、ツツジとカシの枝とを合わせて置いたところに鳥やハナ、宝珠のタマを型どったマユダマを全体に飾り供える。ツツジ

の枝にクモが巣をかける（糸をひく）と、カイコが当たると言われた。

正月十四日の屋すぎ、ウメの枝に家族の分だけマユダマをさし、イロリの四隅を回し、一ずつ食べた。家族の数だけ回すが、昭和三十年頃までだったという。

正月十三日には、黒田の虚空蔵様への御参りがあった。三叉のクワの枝をとってマブシ（ツツジやカシの枝）にオフダを付ける。それを神棚へ一年中飾り供えた。雑木を混せて束としたが、子供たちの小遣いとなりになった。

また、十一月三十日にモチツキ、三十一日には正月のオカザリが行われるが、機神様といつてニカイダイ（ネダ）の柱のカタクギ（まがったクギ）にマツの枝を縛りつけ、そこへ正月モチのキレハシ（のしたモチのフチ）を長くしたものをひとつ結びする。オシラサマへは、小さく切ったモチを紙袋に入れ、ダルマサマの下へさげた。

七、小正月行事とのかかわり

(一) オシラマチとつくりもの

十四日年取りの日にアズキメシを炊いた。黒田では、タチウスの上へミに供えたものをした。

(二) ドンドンヤキとつくりもの

特にないが、柏木では、マユダマとカタナとそれぞれ一本ずつ持ってきて、まっ黒く焼き、玄関入口の上に飾り、魔除けとした。

(三) 十五日粥（小豆粥）とつくりもの

カユカキ棒の割れた先にマユダマを付け、シラガユを三回かき回す。

神棚へ正月二十日（オタナサガシ）まで置いておき、その後カマドで燃やす。ハラミバシは、神棚のものだけはとつておき、他は燃やしてしまう。

(四) 十六日の行事とつくりもの

この日だけは、仏壇の仏様へ酒を供える。オサゴと水を持って墓参りする。

(五) マユカキ

正月十七日の朝にマユカキをするが、ザルなどにマユダマを入れている。

(六) 小正月の供えもの・飾りものの片づけ

正月二十日をオタナサガシといい、供えものを全部さげてくる。タワラはそのままとする。

この日の朝、オカユを煮て、その中へマユグマを入れて食べる。

塩沢では、二十日の風にあわせるなどって、十九日に供えたものは取ってしまう。

晩はオイベスコウで、かせぎに出る日とされている。

(七) つくりものの最終的処分

神棚の大小のカタナなどは、子供の遊び道具となることもあるが、カザリモノとともに燃してしまふ場合が多い。

(八) その他

蛇・ムカデ除けにマユダマの汁をまくようなどはないが、山の中でクゾフジのツルを裂くと、蛇がよってくるといわれた。

(今回の小正月のツクリモノ調査にあたっては、黒沢公一氏、斎藤栄氏の協力を得られたことを付記しておきたい。)

(神宮善彦)

高橋登美治家のつくりもの

一、概観

高橋家は、神流川の支流間物沢川の上流、やまに囲まれた小さな盆地のような狭い土地の畑作中心の農家で、「小正月のつくりもの」は欠かすことなく作って供えてきた。「つくりもの」は全てヌルデで作り、ハナはキクバナがない。カタナは大小ともかなり長いものが多く、フクイは六本をしばったもので、文字も特色がみられる。農具の模造品は、わら束に立てられて供えられ、アワボ・ヒエボは、堆肥小屋に立てる大きめのものと、歳神など神仏に上げられる小さなものとの二種類あるのも山中の特色といえよう。オキンマラは一戸一本作って道祖神に奉納するものである。

高橋氏は、間物の大きな行事であるオンマラサマの御神体の製作者でもある。

二、山入り

元日の早朝、除夜の鐘を聞くと行つてよい。方をみてアキの方へ行き、向きはかまわすハヤス（切る）。藤つるでしばり、ショイコで背負つて来る。持ち帰ったオッカド・モミジは、南向きの少し高い所に置き、オサゴを進せる。犬に汚されないようにする。山から帰ると「山入り餅」を食う。お供え餅と同じものである。昔は家の男衆はみんな行くこともあった。

切つてくる木は、ハナや「つくりもの」に使うものはオッカド（ヌルデ）の太いものや細い枝。マユダマに使うボクはモミジやツツジを使うが、ない場合は雑木で間にあわせることもあった。ボクはザシキに飾るもので、株ごと切つて来て、坐りよく手入れをして使ふわけである。

三、ものづくり

「モノヅクリ」といい、十四日の午前中にする。いろいろ端が中心だが、削りくず・切りくずを燃しながらの作業で都合がよい。時に玄関先の隅あたりのよい所でやることもある。台は適当なものを使い、できたものは箕の中に入れておく。

(一) ハナ

カキバナ・ロクジバナを作る。オッカドの枝を皮つきのままカマで削りを入れ、ハナとするもので(カキバナ)、ロクジバナは七段のもの一本と削らないもの一本とで一組にする。ハナを削るものは柄の部分を残して皮を削ってハナをかく。(写真五十)

(二) カッカラボッコ

他地区的アワボ・ヒエボにあたるもので、オッカドの木を適当な長さに切ったもの六本を用意し、半分は皮をむく。竹は半分割りにして先を六つに割り、火であぶって曲げて、これにオッカドをさす。これを一本作り、二か所に立てる。

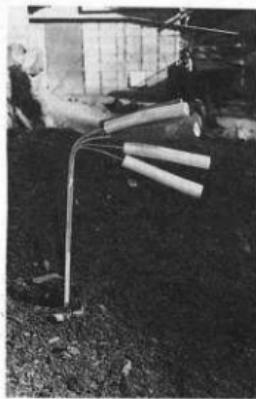
本来のカッカラボッコは、竹を四つ割りにし、その一本ずつの先を一つ割りにしたものへ皮つきのオッカドと皮をむいたオッカドを一本ずつさしたもので、家の内外の神仏に上げるものである。(写真五十一)

(三) アワボ・ヒエボ

カッカラボッコよりも太いヌルデを使い、皮をむいたものを三本、皮つきのものを三本、合せて六本作り、竹を削ったものにさして仕上げ、堆肥の上にさす。(写真五十二)



(写真51)



(写真52)

(四) カユカキ棒

オッカドの木を一本用意し、柄の部分の皮を残して先の皮をむき、四つ割りにしたもの一本合せてオッカドの皮でしぱり、削ったところへマユダマをさし、神棚に上げておく。

(五) ハラミバシ(大福箸)

中央がやや太くなるように作る。数は



(写真50)

家族数に神様の分一膳を加えた数である。

(六) ワキザシ

大小いくつも作り、時につけをつけることもある。銘は書かない。家族分はやや小さいものであるが一人一本は用意する。柄の部分は皮をつけ、他は皮をむく。(写真五十三)

(七) フク依

タワラとか七福神と呼び、太いオッカドの木を六本(長さは不定)、皮をむき、わらなわで二重または三重に「か所しばり」とし(結び目は上にそろえる)、七・福・神・金・円・叶の文字を木口に書く。(写真五十四)

(八) オニノハ

オッカドを二つ割りにし、下を削って立つようにし、上方に墨で家族数だけの横線をひき、その下に「十二月」と書き、その下に「鬼」と書く。四本作る。(写真五十五)

(九) 農 具

エンガ・クワ(「山中テング」とよぶ刃先の両端が尖り、中央部が凹む特別な刃をもったテング)・トグワ(トウゲワ)・キネを各一本ずつ作る。刃先は墨で黒く描く。特に「山中テング」は石まじりの傾斜地で使用するものなので刃先に特色があり、柄の勾配もきつく「ヘノコ勾配」にするところが他地区とちがっている。作ったものは、わらのまき俵を作り、これにオッカドの木を薄く削って三角に削り、これをさしこんで安定するようにしてから、幣束を立てるよう農具の柄をさして立てる。(写真五十六)また、台の木には「豊作万作」「天下泰平」と書く。

(写真54)



(写真53)



(写真55)

道祖神に供えるもので、木がねじれているものほどよいと

いう。太さ・長さにきまりはなく、手に入ったもので作り、上部は皮をつけ、下は削ってとり、「奉納道祖神 高橋氏」と

書く。一本でよい。(写真五十七・五十八)

(十一) マナ著

ハヤシタ(切ってきた)竹で作る。正月になつてから使うもので、一組作る。

(十二) ハイハキ

ジロ(いろいろ)の掃除用に作るもの。竹を割つて先を四・五本に分け、オッカドの板を作つて穴をあけ、竹をさしこんで作る。

(十三) マユダマ

十四日朝作る。米の粉で白いマユ、トウモロコシの粉で黄色いマユを作るといつて二種の粉を使つたこともあるが、今は米の粉だけ、鳥の形(適当な数)・宝珠のタマ(十六個)・カユカキ棒のタマ(二個)・マユダマ(丸いのやマユの形)は大量に作る。神棚に上げるのは梅の枝に鳥とマユの形をさして上げ、門松にも同じように上げる。サンキにはモミジのボクにさして、上方に宝珠の玉をさし、あとはマユダマをさす。キリダメと呼ぶ長方形の箱(昔、人寄せでウドンを打つたりした時、切った生ウドンを入れておいた箱)に入れておいてマユダマをさした。さし終るとアオキをとってきてはボクの根元を飾り、株をかくす。

四、お飾り覚え

十四日の午前中に「つくりもの」を作り、マユダマを作つて供える。神棚・年神棚へワキザシを上げ、カツカラボッカラを上げ、梅の枝にさしたマユダマを供える。門松をはじめ、内外の神



(写真56)



(写真57)



(写真58)

仏にも同様にするが、庭先のカズフカシ小屋には大釜があり、そこの釜神様にも供える。ザシキの中央にはお天神さまの分としてマユダマを供える。(写真五十九)鳥一個、マユダマ三個をさした梅の枝である。オシラ様には小さい餅を十六まるめて一升桶で供えてるので(大正月の供えもの)特にこれというマユダマはない。フク様は神棚の左隅に上げて一年中そのままとする。農具も同じ場所へ並べて上げる。アワボ・ヒエボは、堆肥場と上の烟に立てる。作神様への供えものという。

五、小正月行事とのかかわり

(一) オンマラサマ

村中の小正月行事として、十四日午後、一戸一人が出て宿に集まり、オンマラサマを新しく吊るす。(この時御神体作りは高橋登美治氏がやる)。(別稿)

(二) ドンドン焼き

十四日夜やるのは正月の余り松を燃す。

十五日には、「オカザリカエ」で外したお松を集めて燃すもので、十個くらいの小屋を行事(祭り世話人)の指図もあって作って燃す。ワキザシをこの火でヒドル(こがす)と家に持ち帰ってドボウ(玄関)に立てておく。

(三) 十五日粥

十五日朝、小豆ガユをし、カユカキ棒を入れて三度かきまわして神棚へ上げ、また三度かきまわして神棚、さらに三度かきまわして神棚に上げる。その間、口には出さないが「一年中の室内安全」を祈る。粥はハラミバシ(大福バシ)で食べる。

カユカキ棒とハラミバシは、二十日のオタナツバレエがすむとシメナワでしばり、大黒柱の上、棟木の下にしばりつけておくので、毎年のものがたまっている。

(四) 葬参り

十六日に家内そろって葬参りをする。水・線香・オサゴを持ってお参りして来る。



(写真59)

(五) マユカキ

マユダマをさすことを「早く起きてオコサマアゲ（上藤）をするか」というように、下げる」とはマユカキという。十七日にする。ザルに入れる。

(六) オタナッパレエ

二十日に全て片づけ、お棚を外す。フク依は一年中神棚におき、箸は長く使うほどよいといった。ハナはいろりで燃やしている。

六、おわりに

間物のムラはオンマラサマ行事が示すように伝統行事がよく保存されている。その中で高橋家はこの地区の行事をのこし、トボウには毎年のオオシメが下がっており、便所には家族数の結びめをつけたイボジメがある。大黒柱には明治三十八年以来のカユカキ棒がしづりつけられている（火事で再建以来という）。二階が蚕室に使われたので紙を貼った天井のすき間から見る大黒柱のシメ飾りの束は見事である。今後も伝統行事が継続されることを願いたいものである。

(阪本英一)

御 神 体 行 事 (補 論)

一、はじめに

多野郡中里村大字神ヶ原字間物では、一月十四日午後、村人が集まつて通称オンマラ様と呼ばれる御神体を作り、間物川をまたいでなわで吊り下げる行事がある。「間物のオンマラサマ」と呼ばれていた特色ある行事であり、早くから注目されていたものである。オンマラサマとは、その言葉が示すように明らかに男根を意味しており、これを小正月の十四日に村中で作って飾り、一年中吊り下げることは見方によつては奇祭といえようが、奇祭として好奇心で意味づけをしてよいかとなると問題がある。今回は、「つくりもの」調査の一つとしてその最初から参加して見聞きすることができた。以下はその報告である。

二、行 事

(一) 宿

十四日午後一時、村人が「宿」に集まる。(写真六十)「宿」は、オンマラサマにもつとも近い家で、毎年この家と決まつてゐるという。茶菓でもてなしてゐる家に集まるので、様子をみて酒を出し、煮しめなどを出す。毎年の例となつてゐるので、費用は祭典費から出すことになつてゐる。酒は一升と決まっており、オミキの入ったところで世話人から合図があつて作業にかかることになる。

(二) 行 事(司)

村の祭り行事の世話役は行事とよばれ、一年交替で一人ずつが選ばれる。主な仕事は、春秋の道ぶしん・橋ぶしん・御神体祭り・九月の祭典などである。昔は行司といつたが近年は行事と書いている。

御神体祭りの準備は、前日、ワラの大束を二束用意し、これに湯をかけてしめし、むしろにく



(写真60)

るんでおくことと、御神体（オンマラサマ）を作るオッカド（ヌルデ）の木を切っておくことであるが、オッカドはオンマラサマを作る長老が「小正月のつくりもの」の木を切る時に切っているようである。

(三) なわない

昔はカワソ（麻）で長い縄をなって吊るしたりしたが、現在は常時鉄線を張っておき、これにワラ縄をなって吊るす形式になったので、なわないが村人の仕事になる。人々は、前日から用意のワラを出して、石垣の石の上で叩いたり、手杵で叩いてやわらかくし、手ですぐってハカマをとったりしてワラ作りをし、「宿」の前の道端のコンクリートの上にむしろを敷いてなわないをする。（写真六十一・六十二）一人ずつ一組になり、最初はワラを前後につけてない始めて、少し長くなると背中合せに坐って、一本のなわの前後をそれぞなって行く。参加した人数にもよるが、三組くらいはできる。なわといつても物をしばるものでなく、シメ縄にあたるなわなので、かなり太いもので、なわになつてればよいものといえよう。かなりの長さが必要とされるので相当長時間になるから、その間の世間話が村人の交歓になる。それぞれのなわの長さが目標に達したとみた時、行事の合図でなわないをやめ、それぞれをつなげるが、結びつけるのではなく、ないあわせて一本のなわに仕上げる。（写真六十三）

(四) オンマラサマ作り

オンマラサマ（御神体）作りは長老の仕事になる。用意のオッカドを、よくときこんだ鎌で細工する。男根に似せて作るので、先端を丸くして皮をけずり、やや下がったところにひと巻き皮を残して、中央部分の皮をむき（むきとらずに根元で止めて）、陰毛が立っているように



(写真61)



(写真62)



(写真63)

する。長さは尺五寸というが、実際には毎年少しづつ大きくしたいものと

いう気持ちもあって大きくなり、六十、七十センチメートルにはなってい
る。木もやや曲ったものが多く、仕上げた時、上に反りかえるように仕上
げることにはさすがである。(写真六十四)

オンマラサマは細工ができると、バランスをみながら中央部分をビニ
ルひもでしばって吊り下げるようにして、釘でなわを固定して準備ができる。

(写真六十五)

(五) シメ作り

オンマラサマは五本のシメと、四本のシデ(キリハギ)と一緒に下げる
ので、シメ作りも行われる。なわをなわない人が、正月のゴボウジメのよ
うなシメを五本作る。シデは別に用意するもので、大きいものを作つてお
く。

(六) 吊り下げ

全ての用意がすむと、川の上に吊り下げられ
ている前年のオンマラサマをおろす。昔は麻な
わでやったり、ナイロンコードをないこんだシ
メで吊り下したりしたので落ちる心配があつた
が、近年はケーブルを張って、これに吊るす方
法をとったので落ちる不安はなくなつた。

(写真64)



(写真65)

全ての用意がすむと、川の上に吊り下げられ
ている前年のオンマラサマをおろす。昔は麻な
わでやったり、ナイロンコードをないこんだシ
メで吊り下したりしたので落ちる心配があつた
が、近年はケーブルを張って、これに吊るす方
法をとったので落ちる不安はなくなった。

下げ、ケーブルに固定して引き上げる。(写真六十六・六十七) オンマラサマの吊り下げる、やり直しをすることがあるが、うまく川の方を向いて吊り下げるると作業は完了となる。ワラく
ずが片づけられ、古い御神体やワラが川原で燃されて整理がすむ頃には、谷間の村は暗くなつてくる。



(写真66)



(七) 神を招く

オンマラサマを吊り下げる所は、村の下の方（昔は墨下流だったが、その下流に家ができたので村外でなくなつた）の志賀坂峠へ行く街道の橋だった所で、橋のやや下流よりの上に祀られるもので、上げ終ると行事の指団で一同は橋上に整列して川上に向い、行事の先導で、両手を上げ、神主の神おろしの「たまよび」のように下から鳴り上がるつもりで「オーア」と三度呼ぶ。川上は高い山で、そこには「タケの諏訪様」が祀られているわけで、村人の呼び声で山の神が村に降りてくるものという。（写真六十八）この時からオンマラサマ（御神体）は神性をもつことになる。これでこの行事の一切は終了する。



（写真68）

三、小正月行事とのつながり

オンマラサマ（御神体）行事は「モノヅクリ」の日に、各家の「モノヅクリ」に連続して行われる。間物ムラに於ては、この行事は小正月行事として長く行われて来たのであらためて小正月との関連を考えてみる人もいない。しかも、オンマラサマを作る木は、いろいろの「つくりもの」を作る木のオッカドであり、オンマラサマの陰毛に見える部分もあるいはハナ（ケズリカケ）の意味もあったのではないかと思わせるものがある。

オンマラサマはオキンマラとのつながりもある。中里村を含む神流川流域の町村（上野村・中里村・万場町など）では、「小正月のつくりもの」として道祖神に供える。オキンマラと称するものを作り、これは上野村でいうように「道祖神はスケベ事が好きな神だから、太くてねじていいのがよい」といってことさら大きくなる。明らかに陽物を意識して作られ、名称もオキンマラとよぶ。間物でも作って供えるが、道祖神はオンマラサマを吊り下げる橋を渡った右岸にあり、古いものも多数ある。これをもってオンマラサマを道祖神信仰と結びつけるのは早すぎるが、明らかに性器に神秘な力があったと信じて祀ることがいわれるのはオキンマララにもオンマラサマにも共通である。伝承によると、オンマラサマも昔は、小さい女性のシンボルと大きい男性的のシン



（写真69）

ボルを一つずつ作って吊るし、これでは入らないというので「コレラ入らない」という意味をこめて、厄病除けにミチキリに下げたのが始まりという。「山中領」の頃のことという。奥多野（現上野村・中里村・万場町）は江戸時代山中と呼ばれ、天領であったころの話である。災厄も悪夢も道を通じて村に入ると考えるたちは、村に通する道を通じて村に入ることを防ぐためにオンマラサマが祀られているわけである。（写真六十九）

上野村白井では、昭和十年代まで「水祝い」と称して小正月十四日夕、村人がオッカドで作った陽物を新婚夫婦が神社まで引き上げさせ、これがすむとドンドン焼きになった。万場町小平では、若者たちが根つきのオッカドで陽物を作り、新婚夫婦の家に担ぎこみ、接待を受けた。「水祝い」の行事で、近年復活されている。中里村平原では「小正月のつくりもの」の中に陽物があり、山の神に供えるといふ。生殖・生育の呪物であり、小正月の予祝の「つくりもの」である。

白井・小平の「水祝い」、甘樂郡妙義町音原の「道祖神祭り」、碓氷郡松井田町入山の「かご祝い」などは、早くよい子を生むようにと祝う行事で、オンマラサマにもそうした要素はあって、吊り下げられたオンマラサマが静止して方向が定まった時、その方向にあたった家に「子宝が授かる」、「子どもが生まれる」といわれることは今日でも伝えられている。

四、おわりに

本稿のタイトルを「御神体祭り」としたが以前は「間物のオンマラサマ」と呼んだこの行事も、近年「オンマラサマ」という言葉にこだわる傾向があり、わざわざ御神体祭りといいかえて表現することが多くなり、今回の調査でもそのように表現されたために、この表示をしたわけである。そのことはともかく、この行事は西上州に多くみられる道祖神信仰を考える上で興味深いものであり、村の人口の神として祀られていることは重要である。

間物には水田はない。なわをなうワラは下から求めるところで間に合わせるが、最近、なわをなえない村人の参加が見られるようになってきたことは祭りの伝統にかけりがけている感じがする。

滝上夏男家のつくりもの

一、概観

滝上家は、神流川の最上流に位置し、畑作と果樹を中心とした農家で、これまで「小正月のつくりもの」を中断することなく製作してきたことから、近年、何回かにわたって学校に招かれて伝達講習の講師をやっている。「つくりもの」の種類は数多いが、全てマルデを材料として作られ、十六テンジンとよぶ十六バナもマルデのふたまたの木で作られる。またマルデで作ったキクバナを竹を割ったものにさして作る十六バナは、花束のようなもので特色があり、農具の中の糸はタテギネ、ヨコギネの二種類作っている。カタナの大小は家の魔除けとして作られ「鎌倉五郎入道正宗」の銘を入れる。道祖神に供えるオキンマラは尺二寸もある太いものである。

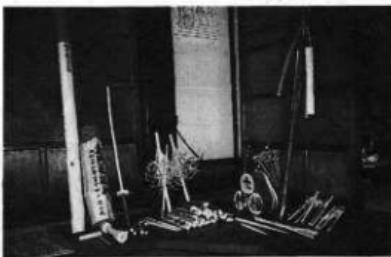
二、山入り

「山入り」は正月二日早朝と決まっており、暦を見てアキノ方の山へ行く。オサゴを持って山へ行き、これをまいて、半紙をさいて立木に結びつけてから大きい木も切る。木は頭で倒して適当な長さに切り、ショイハシゴで背負って来る。木は「つくりもの」の木としてオッカド（マルデ）、マイダマをさすボクはモミジを使い、一緒に切って来る。持ち帰った木は、表の小屋の屋根の上にのせておく。これは汚れないようにするため、大に小便をかけられないためもある。

アワボ・ヒエボに使う竹は適当に切る。

三、ものづくり

「オモノヅクリ」とい、正式には十四日の朝やるわけだが、ふつうは十三日にやり、間に合わないから前日に始めるわけである。（写真七）台所かイロリ端で作業をし、台には木の根っこ部分を使う。大じかけなものを作るわけではないから道具も、鋸・鉈・ハナカキ・小刀程度で、



(写真70)

作ったものは其の中に入れておき、すぐに飾るから場所もとらない。

(二) 十六テンジン

ふたまたのヌルデの枝を同じ長さにして、一方に八個のハナを削り、合わせて十六のハナとするもの。皮はむかすに適當な間隔にハナを削り、順々に八個削るもので、先の方も同じくらい残す。全体の長さは木によってちがうが、六十センチメートルほどで仕上げる。(写真七十一)

(二) ハナ

ヌルデを四つ割りにして、根元の方から適當な削りをつけたもの(根元が下)。皮はむいたりむかなかつたりで、皮をむくとアワ、むかないのはヒエともいう。これが小さいハナである。(写真七十二)

大きいハナは、適當なヌルデの皮をむき、下から削り上げてひとまわり削って作る。ハナは細目にする。

(三) 十六バナ

細目のヌルデを、皮のついたまま根元を下にして、キリダシで短かめに削り出して、芯まで切つてハナにし、菊の花のようなものを作り、尻の芯を小刀で若干穴をあけるようにする。ヌルデの切り口は鋸で切ってそろえてから次のハナを作る。こうして十六個のハナができると、竹を十六本に割つて、先端を尖らせたものへ一個ずつハナをさして、十六バナを仕上げる。

(写真七十三)

(四) アワボ・ヒエボ

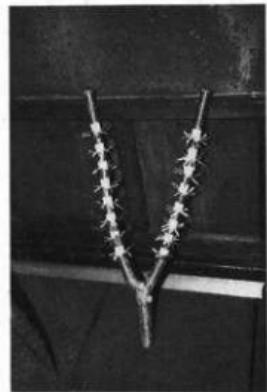
竹は上方を六つに割り、火であぶって四本を下方に曲げ、一本は直立



(写真73)



(写真72)



(写真71)

のままとする。ハナを一本作って上にさし、八寸から一尺くらいの長さのヌルデを四本用意し、一本はそのままヒエボ、一本は皮をむいてアワボとし竹にさして下げる。(写真七十四)

(五) カユカキ棒

比較的細いヌルデで作る。根元は皮をつけて刀の柄のようにし、先は皮を

むいて四つ割りにしてマユダマをさし、十五日第に使う。

(六) ハラミ箸

ヌルデを割って長さ八寸とし、両端を細くして、市販のヤンギ箸のように仕上げる。

(七) マナ箸

長さは適当というが尺二寸ほどにし、元の方を太くし、先の方を細く削って大きい箸とし、十四日夜のウドン作りに使う。

(八) 七福神(フクジ)

長さ・太さはかまわないが、だいたい七寸五分くらいのヌルデを切り、皮つきのまま三本そろえ、刀を作る時の皮でしばり(昔は麻ひもでしばった)、元の方に七福神と書くが、上が七、下右が福、下左が神となる。(写真七十五)

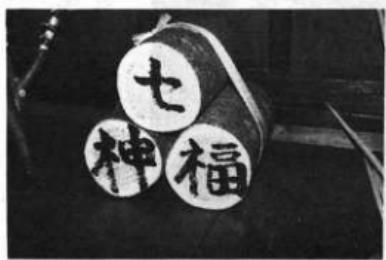
(九) アワボ・ヒエボ(コンコチ)

ヌルデを二つ割りして、上方に十一本の筋(閏年には十三本)を横にひき、さらに鬼と書き、

(十) オニノハ



(写真76)



(写真75)

下に星形を書く（鬼目を書く家もある）。これは柱のある所の下へ立てるもので、海上家では十五本くらい作る。（写真七二八）

（十一）カタナ

大・小と、便所のものとの三本は作る。大刀は長いほどよいというのでやつと担ぐほどのものを作る例もあるという。柄の方は皮つきのまま、刀身の方は皮をむき、「鎌倉五郎入道正宗」と墨書きを入れる。

小刀は大刀よりも小さいもので、作りは同じものだが銘は書かない。

便所の刀は小刀よりも大きくなり、銘はないが、外便所に納め、魔除けとする。

（十二）オキンマラ

道祖神は助幸ごとの好きな神さまというので太いのを喜ぶ。しかもコブのあるものがよいといい、長さ尺八寸程度のものを根元の方の皮を適当にむき（線はきめない）、「奉納道祖神・年月日・海上氏」と書く。（写真七二九）

（十三）農具

作られる農具は、昔は、エンガ・デンガ・ハイカキ・クマデ・タテギネ・ヨコギネをそろえたが、近年は、杵しか作らない。（写真七二八）

（十四）マユダマ

昔はソバ・モロコシ・ヒエなど色のつくようなもので作ったが、今は米の粉で、紅白にする。十一日か十二日のイイ日に石臼で挽いて粉を用意し、十四日に作った。こねる時に夫が「つくりもの」のヨコギネ、妻はタテギネでひと通り搗くのを例としている。杵はそのあと三本荒神の所へ上げて一本おいておく。十六テンジンは大きくし、鳥の形（メス・オス）、梅の花も作り（梅にウグイスという）、少しはマユ形も作った。昔はマユカゴといって四角なものも作った。ボクとよぶマユダマ木はモミジを使う。』



（写真728）



（写真729）

四、お飾りかえ

十四日がオカザリカエで、正月様や神棚、その他の神仏にハナを上げ、マユダマを供える。ボクにさしたマユダマは茶の間に飾られた。道祖神様には、十四日朝、ハナとオキンマラを供え、山の神にもハナが上げられる。山の神には十七日にツツ竹を切って一本しぱり、オミキを入れて供える。アワボ・ヒエボは家に近い畠に立てる。作神様に供えるという。フク儀の七福神は神棚の端に上げ、一年間そのままにしておく。農具も棚の上に上げて供える。

五、小正月行事とつくりもの

(一) ドンドン焼き

滝上家に近い神流川の川原に、村から松飾りの松を集め、竹を三本立てて小屋を二つ作る。オドウロク神とメドウロク神と呼び、夜七時頃、まだ村中が集まりきらないうちにメドウロク神に火をつけ、村民が集まりきったところでオドウロク神に火を入れ、カタナを「ヤキを入れる」といってこがして持ち帰り、トボウ（玄関）に入った所に飾って魔除けとし、マユダマは焼いて食べると力せをひかないうといふ。厄年の人はこの機会にミカンを投げて厄落としをする（白井では、昔は水祝いをした）。

(二) 十五日粥

十五日朝、小豆粥を炊き、炊き上がるとカユカキ棒をさしこみ、三回かきまわして引き上げて拌み、再び入れて三回かきまわすと引き上げ、三度び入れて三回かきまわして引き上げて室内安全を祈る。カユカキ棒はそのまま神棚に上げて、翌年の十四日に燃す。粥を食べる時はハラミバシを使い、その後一年中使うと健康でいられるというが、近年はいろいろ燃してしまふ。嫁をもらうと太く作る。妊娠するようにといふので太くする。

(三) 成り木貰め

マユダマのゆで湯を持って行き、木の根にまくとよく寒るというが、成り木貰めはしない。

(四) マユカキ

十八日にマユダマをとつてザルに入れる。桑摘みざるに入れるのはマユが当るという。

六、つくりものの処分

ハナはイロリで燃す。近年はハラミ等も燃すが、昔は日常の食事に使った。カユカキ棒や七福神は一年中神棚に上げておく。杵は神棚に上げておくが、作業中にキネオトシをした時、馬のス（毛）三本で臼を屋の棟へ背負い上げるという。その時、代りに小正月の杵を馬のスでしばって屋根へ放り上げるという。ドンドン焼きでこがしたカタナは一年中トボグチに飾って魔除けとし、便所に納めたカタナはいつの間にかなくなるのをまつた。

七福神は、十四日にマユダマをゆでる時に燃すきまりになっていた。

七、おわりに

上野村の「小正月のつくりもの」は、ヌルデを材料として作られるのを特色とするが、かつてはどの家でも種々の「つくりもの」を作つて小正月行事を行ってきたが、近年は略式になり、年々やる家が減つて近所でもやる家がなくなってしまったという。そんな中で、今年は特別に作つたものが多かったというが、話の中に出た白井の水祝いは、村中でオキンマラの大きいのを作り、十四日夕方、新婚夫婦が坂上の神社までヤツコラサと引き揚げ、これが終るとドンドン焼きになつたという。昭和十年代までやっていたものという。

二十日のエビス講には、朝、マユダマをゆでて家中で食べるが、これはエビス様がはたらきに出るゴイワイのお茶受け（茶菓子）として膳立てして祝う料理の一つという。マユダマも養蚕のなくなった今日では、蚕とのかかわりはほとんどみられなくなっているといふ。小正月行事を含む行事の変化は想像以上の速さで進行していることを物語つていよう。

（阪本英一）

神戸国吉家のつくりもの

一、概観

甘楽郡下仁田町青倉は、戦後の町村合併前までは甘楽郡青倉村であった。

大正の初め頃からこんにゃくの栽培が盛んになり、水田はほとんど畑にかえられた。昔は、青倉紙の生産が行われたが、昭和に入つてからは、紙をすぐ家も少なく、楮の皮をもいて紙の原料として売るようになったといふ。

このようしたことから、「小正月のつくりもの」も、水田とのかわりはほとんど消えたといつてもよい。

畑仕事・山仕事・紙の原料の楮の木を利用しているのは、この村の特徴ではないだろうか。

二、山入り

「山入り」の日は、正月四日の朝で、どこの山へ行くかは、暦を見てアキの方に向へ行く。今年は東の方向であった。

「山入り」の方法は、供えものとして、オサゴ（米）と御幣を持ち、（写真七十九）祀り方のきまりはないが、一年の無事を祈り、山の神を拝んでから切る。

木を切る時は、前年に縁起の良かった家の木を切る。ナラの木の根元を六七十センチメートルぐらい残して切る（株は山の神にさしあげる）。

切る木は、ノリデ（ノリデンボウ）で、これは「つくりもの」用である。神様用にはウメの枝を切る。ウメの枝も前年に良いことのあった家のものをもらうが、その家人は何も言わない。仏壇用にはツツジの枝、座敷用にはナラの木（芯のあるもの）を切る。運び方は、藤ヅルなどでもるいて、肩に担いで運ぶ。家へ持ち帰つてからは、屋敷神の所に置く。その時、塩で清めるのを例とする。



（写真79）

三、木の種類

(一) つくりものに使用する木

ハナに使う木はカズガラボウ（紙の原料の楮のホリカズの皮をむいたもの）で、「つくりもの」にはノリデ（ノリデンボウ）を使用する。

(二) マユダマをさす木

年神・オシラ様・家の外に供えるマユダマの木にはウメの枝を用い、座敷に飾るマユダマの木にはナラの木（芯つき）、仏壇に供えるマユダマの木にはヤマツツジの木を使う。

四、作る日・場所・道具

「つくりもの」をさす日を「ものづくり」といい、その日は十三日の午前と決まっている。（写真八十一）

作る場所は蔵の前で、道具には、ノコギリ・ナタ・カマ・ハナカキナタを使う。

作業する台には、ノリデンボウの木株や四角の木（柱の切りおとしなど）を用いる。作ったものは、箕に入れ、それをダイドコ（土間のかたすみ）においておく。（写真八十二）

五、作り方

(一) ハナの作り方

小正月のハナと呼ぶ。どれも長さは決まっていない。一段（大きいもの）のものは神棚（五ヶ所）へ飾り、一段の小さいものは、外飾りとする。一本の木で三段か五段に作り、それを切って一段にして外飾り用にする。（写真八十二）

(二) カユカキ棒の作り方

ノリデンボウの径三〜四センチメートルぐらい、長さ二十五センチメートルぐらい（箸の長さと同じぐらい）のものを、木の元を三十パーセントくらいの皮つきとし、七十パーセントぐらいの皮をむき、皮をむいた方の先を十文字に割る（ハナはつけない）。（写真八十三）

(三) ハラミバシの作り方

ノリデの木を長さ二十五センチメートルぐらゐの見当で切り、芯つきに割って、中ほどを幅広く両端を細く作る。正月様の分(神様)の二膳と、家族の人数分(二膳)を作ることになっている。(写真八〇)

(四) フク依の作り方

ノリデの木の直径六～七センチメートル、長さ十五～十六センチメートルのもの三本を皮をむいて、縄でしばり、切り口に七福神と書く。(写真八一)

(五) オキンマラ(カタナ)の作り方

ノリデの木の切り口径八センチメートル、長さ約八十分センチメートル見当(木の



(写真80)



(写真81)

(六) 農具の作り方
ノリデの木を割って作る。作るのは、エンガ・テンガ(クワ)・トウグワ・クマデ・フタツゴ等である。(写真八十二)

(七) マユダマの作り方

マユダマには、米の粉を用いる。粉は買って来る(昔は十二日に挽いたり、用意した)。

作るのは、十三日の夜(この日を「マルメドシ」という)で、作り方や形は、全部同じである(昔は十六メエダマをいちじくの形に作り、ウメのボクの先端にさした)。(写真八十三)
ゆでたマユダマは、ザルなど(別に決めてはいない)に入れてさした。
マユダマの木は、ウメの枝・ナラの枝・ヤマツツジの枝で、供える場所でちがっていた。



(写真82)

六、飾りかえ・供え方

飾りかえは正月十四日の午前中にする。

(一) ハナの供え方

ハナの供え方は次のようにある。

神棚・年神棚・仏壇・えびす様・玄関には一段の大きいものを供える。便所神・屋敷神・墓地には一段の小さいものを供える。

(二) 道祖神への供えもの

供えものは別にない。

ドンドン焼きのやり方は、各家から正月の飾った松・しめ縄などを持ちよ

り、十四日の夜六時頃から火をつけて行う。

(三) フク俵の供え方

フク俵は、座敷のマユ

飾りの台にハナ（大）と
いっしょに飾り、えびす

様へ供える。（写真八十
四）

終わったあとは、一年
間えびす様へ供えてお
き、十一月の大掃除のあ
と燃す。従って二月の初
午には使わない。

(四) 農具の供え方

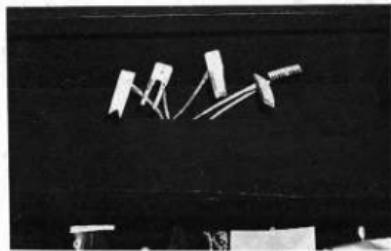
農具は正月様へ供え



(写真83)



(写真84)



(写真85-1)



(写真85-2)

る。作物の豊作を祈るという。二階根太の割れ目にさして供え、一年間供えておく。(写真八十五)

(五) マユダマの供え方・飾り方(写真八十六)

年神様や神棚へは、ウメの木の枝に三個さして供える。オシラ様への供えものというのではない。

七、小正月行事とのかかわり

(一) ドンドン焼きとつくりもの

マユダマをナラの木の枝にさしてドンドン焼きの火で焼き、家に持ち帰つて食べる。カタナをドンドン焼きの火で黒くこがして家へ持つて帰り(写真八十七)入口に飾る。

(二) 十五日粥(小豆粥)とつくりもの

カユカキ棒の使い方は、小豆粥の煮えたっている所を、カユカキ棒のマユダマをはさんだ方で三回かきまわし、おしいただいたあと、無病息災をお願いする。唱え言葉はない。

十五日粥を神様に供えたものは乾燥させて障子紙に包んでとっておき、春の畑仕事の最初の日に、手をなぜながら「虫にさされないようお願いします」と言い、畑に埋める。虫・ヘビ・ムカデにかまれたり、さされたりしないようにといふ。

カユカキ棒は、小正月中は、神棚に置き、初午の日に燃す。

ハラミバシは、十五日粥から使って食べる。小正月中、朝・昼・晩の食事に使い、その後は神棚に置いて、初午の日に燃す。

(三) 十六日の墓参り

十六日には家族そろって、花・水を供えて墓参りをする。寺へ年始をする。



(写真87)



(写真86)

(四) マユカキ

マユカキの日は、十六日の午前で、マユダマを入れる器はオヒツに決まっている。(写真八十八)

八、小正月の供えもの・飾りものの片づけ

十六日の午前に片づけるが、神様へ供えたマユダマは二十日の朝にとる。しかも、神様に供えたマユダマは、えびす講に煮て、供えたり、食べたりすることになっている。

ハナ・カタナは、十六日に片づけたものを、一階へ置いて、初午の日にマンジユウを作る時の燃料とする。

箸にまつわる話はない。

養蚕とのつながりはないが、二月初午にフク俵を燃してマンジユウを作ることに何か関連をつかがわせる。フク俵は、一年中えびす様へ供えておき、年の暮に燃す。

(奈良秀重)



(写真88)

斎藤治郎家のつくりもの

一、概観

甘楽郡下仁田町上小坂は、戦後の町村合併前までは、甘楽郡小坂村であった。

大正時代初め、「こんにゃく」の栽培が盛んになり、「ねぎとこんにゃく下仁田名産」とうたわれたのは、この小坂地区もその中に含まれている。今もその名声は高い。その関係で水田が畑になり、「小正月のつくりもの」や行事等、水田に関するものは昔がたりとなっている。また、「小正月のつくりもの」も、「楮」との関係がうすれ、山の木を使うものに変わってきたようである。

作物の関係で、米を買うようになり、ヒエ・アワ・トウモロコシ等を栽培しなくなった関係で、飾りものも昔がたりとなってしまった。

二、山入り

「山入り」の日は、正月一日と決まっている。山は主として自分の山へ行く。

「山入り」の方法は、供えものにはオセンマイ（米）・タツクリ（ゴマメ）・おみき（酒）を用

意し、御幣は、作ったものを持って行く（供え物を包んだ半紙をさいて作ることもある）。山へ着いたら、立木に御幣を結びさげ、供え物を半紙の上にのせて供えて拝む。（写真八十九）

木を切る時は、その年の暦によって、「アキの方」の方向にむかい、まず、山の神を拝んだ後、付近の小さい木や枯れ草等を除き、安全を確認してからノコギリを入れる。切る木は、ヌリデ（ヌ

リデンボー）、ヤマボウシ（ヤマツクワ）・ミツバウツギ・イタヤカエデである。

切った木は、肩で担いで大通りまで運ぶが、近年はトラックで家へ運ぶ。運んで来た木は清淨な場所に立てかけて置く。供えものとして、オサゴ・ゴマメ等を供える。



(写真89)

三、木の種類

(一) つくりものに使用する木

ハナには、ヌリデ（ヌリデンボー）を用いるが、昔は、コウゾの木（カズガラ）を使った。

「つくりもの」には、ヌリデ（ヌリデンボー）・イタヤカエデ・ミツバウサギを使う。

(二) マユダマをさす木

年神・オシラ様・座敷・家の外に供えるマユダマの木には、ヤマツクワまたはボク（ヤマボウシ）を使う。

(三) その他の木

ヤマツクワの木のない時は、ウメまたはナラの枝を用いる。

四、作る日・場所・道具

ものつくり日を「ものつくり」といい、正月十一日と決まっている。

作る場所は、陽あたりの良い庭（便所に遠い清浄な所）または、寒い日には「イロリ」端で作る。

道具には、ノコギリ（現在は電動鋸もあわせて使う）・ナタ・小ナタ（ケエダレカキナタ）を使い、台には、ヌリデの木の切り落としや株などを使う。

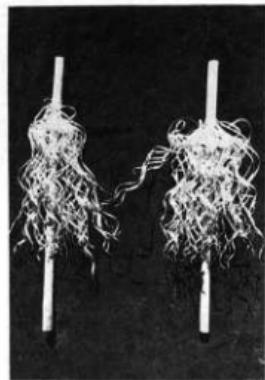
作ったものは糞（写真九十）に入れて、台所または納屋においておく。

五、作り方

(一) ハナの作り方

ハナを「ケエダレ」と呼ぶ。（写真九十一）

一段のものー「ミツバウツギ」のハナをかく。大形のものは神棚三本、トボグチ一本（三十四十五センチメートルぐらい）各々供える。小形のものは仏壇二



(写真91)



(写真90)

本、オミタマサマ一本、えびす様一本、物置一本（十五センチメートルぐらい）各々供える。（写真九十一）墓へ供えるものは、ヌリデの皮付きのケエダレを石塔の数だけ作る（十五センチメートルぐらい）。

(二) カユカキ棒の作り方

ヌリデの六十センチメートルぐらいのものを一本を使い、木の末を尖らし、元の方を十文字に割り、まるいマユダマをはさむ。（写真九十三）

(三) ハラミバシの作り方

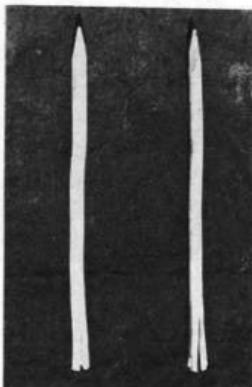
ヌリデを長さ二十五センチメートルに切り、それを削つて、中央を広く両端を細かく削る。（写真九十四）神様五體に家族の人数分だけ作る。

(四) フク俵の作り方

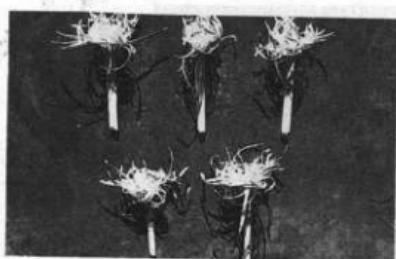
ヌリデの直径四～五センチメートル

のものを長さ一十七センチメートルぐらいに切

り六本用意し、全部皮をむく。その五本を重ねて結び、その上に他の一本を上げてしめる。（写真九十五）



(写真93)



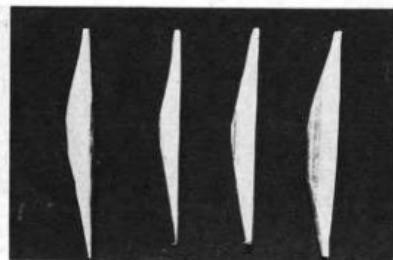
(写真92)

(五) 肥庭飾りの作り方（アーボ・ヒーボ）

ヌリデの細いもの十五～十六センチメートルの長さに一二本切り、このうち



(写真95)



(写真94)

四本は全部皮をむき、四本は半分皮をむき、他の四本は皮をむかない。(写真九十八)これを竹の枝にさす。小正月のうちには、これを米俵の上に立てて飾り、小正月が過ぎると堆肥の上に立てる。皮をむいた方をアーボ、皮をむかない方をヒーボという。

(六) 木刀の作り方

「タチ」または「カタナ」と呼ぶ。太さ・長さは適宜にするが、長さの四分の三ぐらゐを皮をむいて作る。道祖神と家族の男の数だけ作る。それをドンドン焼きで燃やし、主人のものだけ、火をつけたまま家に持ち帰り、それを火種として、燈明に火をつけ神に供える。その後、火を完全に消してトボグチ(家の入口)の上に置く。

(七) マユダマの作り方

粉は米の粉を使うが、昔は、「アイ米」・「トウモロコシ」・「ヒエ」の粉を使つた。粉を挽く日は決まっていない。作るのは、正月十三日夕方である。

大きさは、全部同じ大きさだが、昔は、十六マユダマといい、特に大きいものを二種類三十二個作つた。形は△と△である。

マユダマは籠などに入れてボク(ヤマボウシ)にさした。

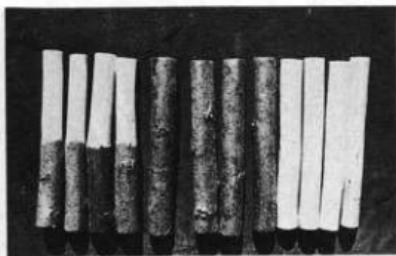
六、飾りかえ・供え方

飾りかえは、正月十四日の朝に行う。

(一) ハナの供え方

ハナの供え方は以下の通りである。神棚・年神棚・仏壇・門口にはケーダレ(大形)を一本供え(写真九十七)、えびす様・屋敷神・堆肥舎にはケーダレの小形のものを供える。また、墓地にはケーダレの皮付きのものを石塔の數だけ供え、神社やお堂にも同様のものを上げる。

(二) 道祖神の祀り方



(写真96)



(写真97)

供えものとして、十四日の朝、カタナ（写真九十八）とケーダレを上げる。

ドンドン焼きのやり方は、十四日の夕方、飾りかえの四松その他を川原等で集め、大勢集まつた所で、火をつける。その時カタナを焼く。また、書きぞめや婦人の毛髪等を燃し、マユダマを長い棒にさして焼き、周囲の人と交換して食べる。

（三）フク俵（写真九十九）



（写真98）

フク俵は、えびす様・大黒の神棚へ上げる。これは、一年間、えびす・大黒のお棚へ供えておき、年の暮の大掃除の時に燃やす（フク俵を燃した灰を家のまわりにまくと、火伏せ・虫除けになり、金がたまるという）。

（四）肥庭飾りの供え方

アーボ・ヒエボは、庭の隅に立て、小正月が終わると堆肥の上に立てる（昔は、小正月のうちは米俵の上に立てた）。何様に供えるかはわからない。

（五）マユダマの供え方・飾り方

年神様や神棚への供え方は、ヤマツクワの小枝に三～五個さして供える。（写真百）

（写真99）



（写真99）

七、小正月行事とのかかわり

（一）十五日粥（小豆粥）とつくりもの

カユカキ棒は、現在はやらないうが、昔は、マユダマをはさんだ方で小豆粥をかきまわし、粥の米つぶをつけた。

（二）ハラミバン

十四日の飾りかえの日に、神棚へ一膳供える。昔は、家族は十四日の朝から使った。小正月中はこれを使い、神棚へ置いて、苗代の水口に立てた（今はいない）。



（写真100）

(三) 十六日の行事とつくりもの

マユネリとは言わないが、十六日の早朝にマユカキをすませ、マユダマを鍋でゆでて朝食にする。

(四) 十六日の墓参り

生花・水・オサゴ（米）を持ち、家族全員が墓参りをする。その日は、馬屋肥は出さない（昔は、十一月二十八日、馬の年とりと言ひ、馬屋肥を必ず出した）。

(五) マユカキ

マユカキの日をメエカキという。十六日の早朝、座敷のマユダマのボクの前に、燈明とお茶を供えてからメエカキをする。その後、メエダマをゆでて朝はんにする。マユダマはザルなどに入れ、その後、「カン」または「オヒツ」に入れて保存した。マユダマに関する話はない。

(六) 小正月の供えもの・飾りものの片づけ

片づけは十六日にする。マユダマの木などは、庭で薪用に切って木小屋へ置き、燃やす。

八、つくりものの処分

ハナは十六日にとりはずしたあと、イロリで燃す。

カタナは、道祖神に供えたものは、そのまま家の主人のものだけ入口の上に置き、魔除けにする。

フク儀は、えびす様の棚に供えておき、十一月の大掃除の時、燃すことになっている。

(奈良秀重)

市川太平家のつくりもの

一、概観

南牧村は、南牧川の両岸の狭い他に部落が点在しており、平地はまことに少なく、耕地は急傾斜の所まで石垣を積んでその上を畠地としている。

従って、水田はほとんどなく、畑作のみで、養蚕とこんなにやくにたよっている。このような関係から、「つくりもの」にしても水田に関するものはなく、養蚕・畑・山林についてのものが多い。その養蚕もほとんどやらなくなつたので、その関係も消えつつの現状である。また山の木を大切にする気風が見られるのもこの村の特徴のように感ぜられる。

二、山入り

「山入り」の日は、正月一日（今年は仕事の都合で五日）で、たつみ向きの山（裏山）へ行く。毎年同じ所へ行くもので、江戸末期の頃、八十才すぎの人が開墾して畑をつくったという言い伝えから良いことのあるように、その山へ行くことにしていている。

「山入り」にはオサゴを供えるとして持つて行き、そのオサゴを包んだ紙で御幣を作り、木の枝に結びつけて拝む。（写真101）

木を切る時には特別のことではない。ヌリデンボウを切り、肩に担いで運ぶ。運んで来た木は物置の所へ置く。

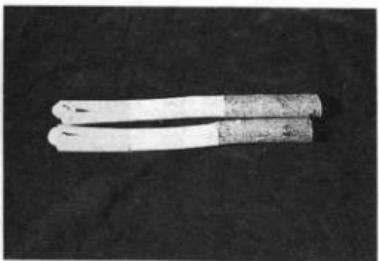
三、木の種類

「つくりもの」に使う木はヌリデンボウと決まっている。また、マユダマをさす木は次の通り



（写真101）

である。即ち、年神のマユダマの木には、ウメの枝・サクラの枝を用い、オシラ様には、ウメの木、ザシキに飾るマユダマの木には、カシウスミを用いる。



(写真102)



(写真103)

四、作る日・場所・道具

正月十四日の朝早くから、庭先にむしろなどの敷物をします、ものづくり日は、「よろずものづくり」または「おつくり」という。

正月十四日の朝早くから、庭先にむしろなどの敷物をして作り、道具には、ナタ・カマ・ノコギリ・ヨキ(マキワリ)などを用い、台には、ヌリデンボウの切りおとしなどを使う。作ったものは、ザルなどに入れ、作った日に飾ったり、供えたりする。



(写真104)

五、作り方

(一) カユカキ棒の作り方

ヌリデンボウの切り口径約三センチメートルぐらい、長さ二十一～三十センチメートルぐらいのものを一本使う。(写真百四) そして、元のところを約四分の一ほど皮を残し、あとは皮をむき末を十文字に割ってマユダマをはさむ。

(二) ハラミバシの作り方

ヌリデンボウを長さ約二十五センチメートルに切り、それを割って、中程を幅広く、両端を細くして作る。年神様のものを一膳、それに家族の人数分だけ作る。(写真百三)

(三) フク後の作り方



(写真105)

メートルのもの七本全部皮をむいて、ヌリデの皮でなわをない、六本をまずし
ばり、その上に一本をしばる。切り口に、上から、宝・金・弓・学・栗・豆・
米の字を書く。(写真百四)

(四) 肥庭飾りの作り方

アーボ・ヒーボというが肥庭には飾らない。「オカラコ」といい、ヌリデン
ボウの切り口径約三センチメートルぐらい、長さ十六~十七センチメートルの
もの一本で、一本は皮をむき、他の一本は皮をむかない。これを一組として、
ヌリデンボウの皮でしばる。これを二十組ぐらい作る。(写真百五)

(五) オキンマラ(カタナ)の作り方

タチともいう。ヌリデンボウの切り口径七~八センチメートルぐらい、長さ
五十一~七十センチメートルぐらいのものを約四分の一の皮を残し、約四分の三
の皮をむいて(写真百六)、皮をむいた所へ「奉納道祖神 市川氏」と書く。こ
れを道祖神へ供える。他の一本は少し細めのもので、長さ一メートル以上もあ
るものを作り、それを約四分の一の皮を残し、他は皮をむく(ドンドン焼き用)。

(六) 農具の作り方

現在は作らない(昔は、ウス・キネ・エンガ・クワなどを作ったという)。

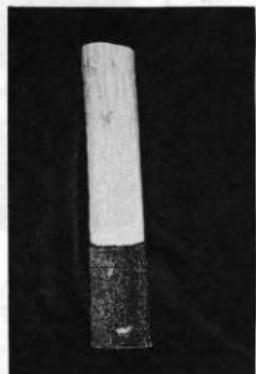
(七) マユダマの作り方

粉は米の粉を買って来る。昔は、ソバ粉・大麦粉(あらっこな)・モロコシ粉・トウモロコシ粉を使つた。

粉は昔は、十一日(くらびらきの日)に手挽きにした。

マユダマは十四日にする。全て丸形で、オシラサマには三十三個さして供える。

マユダマ木は、神様にはウメの枝またはサクラの枝を用い、座敷にはカシウ(オ)スミまたはヤマツクワを用いる。



(写真106)

六、飾りかえ・供え方

飾りかえは、正月十四日午前中である。

(一) ハナの供え方

次の所にオカラコ（アーボ・ヒーボ）を一対ずつ供える。

神棚・年神棚・仏壇・えびす様・金神様・玄関（写真百七）。

屋敷神（イナリサン）・井戸神様（水神様）。墓にも「オカラコ」を各々の石塔に一対ずつ供え、埋めた所へも供える。

また、天神様・山の神にも一対ずつ供え、道祖神にはカタナ（タチ）一本を供える。

(二) 道祖神の祀り方

カタナ（タチ）を道祖神に供える。（写真百七）

ドンドン焼きのやり方は、川原に各家から燃す木を出して、夕方火をつける。その火で長い（二メートル）タチを

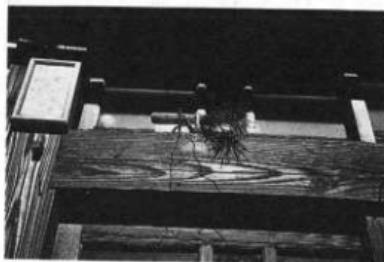
黒くこがして家へ持つて帰り、入口の上に飾る。（写真百八）

自分の家の前の川原は自分のものと考えており、自分の家の川原でドンドン焼きをすると家が榮えるといわれ、大きな燃し木を自分の川原へ置いて、そこでドンドン焼きをしようともひっぱりっこをしたという。また、その煙がかかった家は榮えるといわれている。この火で、女人の人の髪を焼く。また、女の十九才・三十三才、男の二十五才・四十二才の厄年の人がその数のミカンを投げる。

(三) フク俵

神棚へ上げ、終わつたあともそのまま神棚へ一年間置く。農具の「つくりもの」は、昔はやつたが、現在はやっていない。

(四) マユダマの供え方・飾り方



（写真107-1）



（写真107-2）



（写真108）

ウメの枝またはサクラの枝にさして、神棚の横に前の方へ枝が出るように供える。

オシラ様への数は、三十三個と十六個をウメの枝にさして部屋の片すみに供える。形は丸型で、使う木はウメの枝である。

七、小正月行事とのかかわり

(一) ドンドン焼きとつくりもの

約一メートルの長いカタナを作り、ドンドン焼きで黒くこがして家の入口の上に置く。これは魔除けとなる。

(二) 十五日粥（小豆粥）とつくりもの

カユカキ棒は、マユダマをはさんだ方で小豆粥の煮えたっている所を浅くかきまわして、粥のつぶをつけ、神棚に供えておく。台風などで大雨や大風が吹くとき、庭へこのカユカキ棒を投げ出し、風水害の災難除けとする。風雨がおさまった後は、それをひろいあげてまた神棚に供えておく。

ハラミバシは、小正月中使う（昔は一年中使った。先が太くなると削って使ったという）。

現在は、小正月中使ったあと、燃すことにしている。田や畠の作業との関わりはない。

(三) 成り木責め

成り木責めとは言っていないが、十四日のマユダマをゆでた汁を柿の木の下へまく。

(四) 墓参り

十六日に墓参りをする。家中でするもので、また、寺へ年始に行くことになっている。

(五) マユカキ（写真百九）

マユカキは、十六日の午前である。とったマユダマを入れる器は、ショウギ・一升マスなどで、十九日をメエダマのトシリといい、オカユとメエダマと一緒に煮て、ユウハン（オイハン）にする（年神様に供えたマユダマは十六日にはとらないで、十九日にとる）。

八、つくりものの処分

(一) カタナ



(写真109)



(写真110)

道祖神に供えたものは一年中置く。ドンドン焼きで黒く^こがしたものは、家の入口の上にあげて置く(魔除け)。オカラコは、十六日に片づけたあとは、子供のオモチャなどにし、そのあとに燃す。

(二) その他

ドンドン焼きの灰を十五日の朝石垣のまわりと家のまわりにまく(ヘビ除け、虫除けとなる)。

また、マユダマを作る時に、その粉で、生活用具・トリ・カメ・イヌ・ネコその他いろいろの形のものを作って神様に供える。子供の楽しみといわれている。(写真百十)

(奈良秀重)

浅香英雄家のつくりもの

一、概観

浅香家は、甘利郡甘利町秋畠那須に居住していたが調査時、同町造石に転居した。(写真百十

一)「つくりもの」は、父より教えられ、一之宮の市へ売りに行つたこともあるというが、「つくりもの」の商いは、他に売るものがない人の商売だったという。

最近は、小学生に「つくりもの」を教えている。

二、山入り

一月一日の暗いうち、夜の明けるのを待つて出かけた。山は裏山の民有林で、曆を見てふさがりでない方へ行った。正月の木だけは民地でも自由に切つてよかつた。

米(オサゴ)と、四角の小さいモチを二つそなえ、御幣を木にさげて拝む。唱え言はない。ノコとナタでヌルデの木を切り、ショイコで背負つてくる。切った木は、家のはじめに立てておく。

ハナに使う木は、カズの木、「つくりもの」はカズとヌルデの木で、今はニワトコの木を使つている。マユダマの木は、ヤマクワの木で、枝の大と小のものを選んで切つてきた。カシ・ナラ・ウメの木を入れて、マユダマ飾りを作る。ウメはオシラ様のマユダマの木という。

ナラとカシは、ナラばカシがあるようにといふ意味があるという。ニヨウバイの木にマユダマをつけたものは、ドンドン焼きに使う。



(写真111)

三、ものづくり（写真百十一）

(二) ハナ

昔はカズの木、今はニワトコの木を



(写真113)



(写真112) ものづくりに使用する道具類

使う。一段のものは、十五センチ
メートルのコバナ（写真百十三）、二
十センチメートル

のチョウバナ（写
真百十四）、二十
五センチメートル

ルのオオバナで
ある。（写真百十
五）十二段（写真
百十八）と十八段



(写真114)



(写真117)



(写真116)



(写真115)



(写真120)



(写真119)



(写真118)

(二) カユカキ棒

ヌルデの三十センチメートルで僅三センチメートルぐらいのものを、五センチメートルぐらいの皮をのこし、あとはむく。むいた方の先を四ツ割りにし（写真百十八）マユダマをはさむ。

(三) ハラミバシ

ヌルデの太いものを削って作る。（写真百十九）長さは八寸ぐらいに切る。神一組・仏一組・恵比須一組・お釜さま一組の計五組に家族数作る。

(四) フク俵

ヌルデの木を切り、皮をむき水引きでしばる。金・銀・俵の文字を書き入れる。（写真百二十）

(五) 肥庭飾り

ヌルデかカズの長いものに、一段ハナをかいだものを立てる。

(六) カタナ（写真百二十一）

ヌルデの木の一メートルのものをとり、二十七センチメートルの皮をのこし、他の皮を削る。削ったところは、ドンド焼きで黒くこがして、玄関のかまいの上におき、悪魔除けにする。「悪魔っ払い」という。

(七) 道 具

ヌルデの木を切って、割つて作る。柄



(写真121) カタナ（大）



(写真123) 小正月のつくりもの。



(写真122)

もヌルデの木を細く削って作る。金属部分は墨でぬる。

エンガ・テンガ（写真百二十一）・キネ・トウグワ・クサカキを作る。

四、お飾りかえ（写真百二十三）

正月十四日にやった。

ハナは、供える所で違う。

コバナは、便所神・屋敷神・土蔵・作業所・井戸神・墓地・石造物・お堂である。

中バナは、神棚・仏壇・恵比須様・釜神様・床の間（写

真百二十四）・機神様である。

年神棚には（写真百二十五、百二十六）ハナを一本、馬屋には、長いハナ、玄関には一段の大きいものを一本、門口には、栗の木の柱を一本立てて大バナをたてる。堆肥舎には長いもの、オシラ様には十六段バナ、畠には長いハナを立てる。山の神には供えない。

マユダマ飾りの木はヤマクワにナラ・カシの木を入れた。（写真百二十一）

粉は、米の粉・モロコシの粉・さつまの粉・キビの粉を使い、石臼でひいて、こねてふかして作った。田がないところなので、米を買ってきて作った。

一日早々から口をひくのはいやがられたので、十二日に用意しておいた。



(写真125)



(写真124)

十四日朝から作り、ショウギに入れてさした。

私が三個、便所が二個、イナリ（屋敷神）が二個マユダマをつけたもので、オシラサマには、大きいマユダマを土へさした。これは十六デンジというので十六だという。オシラサマのマユダマには、コバナをマブシの代りといってつける。

肥庭飾りはない。

フク俵は、神棚の隣で、恵比須・福の神に供えるという。一年中飾っておくが、一月初午には使わない。

農具は、歳神さまに供えるという。

農耕の順に飾るといい、向って左から、エンガ一個・テンガ二個・トウグワ一個・クサカキ一個・キネ二個の順で並べる。神様から見て右からという。

また、マユダマ木には、かぶを二株そなえる。株がふえるように願ってのことだという。



(写真126)

五、道祖神とドンド焼き

十五日朝、ドンド焼きを行う。正月飾りを燃やした火で、ニョウバイの木に家族の数のマユダマをつけて焼く。持つて帰り、かぜをひかないように一つずつ食べる。

ドンド焼きのあと、桑の木を燃やした。

また、ドンド焼きに、カタナを作り、刀の部分を火でこがした。

六、十五日粥（小豆粥）

カユカキ棒でかきまわした。「作物が風でとばされないように、子供がかぜをひかないように」と唱えた。食べる時は熱くても吹いてはいけないといわれた。風が吹くという。

カユカキ棒は、神棚にあげておくが、田がないので、水口にさすということはない。煙にもささない。ハラミバシは、使って使いすてにする。

七、マユダマカキと片づけ

正月十六日に「マユダマカキ」をする。マユダマ木からマユダマをとって、おけに入れておく。お蚕をはいて、日が長くなつたころ、マユダマコロガシにした。焼いてさとうみそで食べた。片づけは、二十日前にした。二十日正月の風にあてるなどといった。いろいろで燃やした。

八、養蚕とつくりもの

マユダマ・オシラサマへ供えるものなど関係は深い。

マユダマ木に、マブシの代りにハナをあげる点によく表われている。

九、その他

甘樂町秋畠那須には、田がなく、田と「つくりもの」の関係は出てこなかった。

また、成り木責め・ゆで汁まき・十八粥はない。

十、まとめ

浅香家の「つくりもの」は、現在も生きている。転居し、秋畠から離れたが、新居でも作る他、秋畠にも出かけ、「つくりもの」を作っている。

また秋畠分校を始めとする小学校にも作り方を教えるなど、活躍している。

上原富次家のつくりもの

一、概観

上原家は、現在松井田町新堀にあるが、以前は、上増田の大久保に居住しており、そこで父より「つくりもの」を教えられた。

二、山入り

正月六日の午前中に行く。大久保にいた時は、箇中にある上原家の山に行つたが、新堀に来てからは天神峠に行った。「つくりもの」を作る木を取る場合、山持ちでない家は、どこの山に入つてもよく、とがめられなかった。

山の入口の木の目の高さに水引でオサゴを入れたおひねりをしばりつけ、根元に白い四角の紙を敷きおひねりと餅を置く。

手をあわせ「これから木を切らせてもらいます」という。

ノコギリで根元を切り、適當な長さに切つて持つてくる。クゾフジの根を立て（取り）二三に割いてしばつてくる。

三、ものつくり

正月十一日、お倉開きの日に、庭や縁側で作つた。（写真百二十七）台はボクの木の根の太い所で、家によつては、一升マスをひっくり返して使つた。

作ったものは、昔は箕、今はダンボールに入れ、物置か台所においた。カユカキ棒は神棚の隣に置いた。

(一) カユカキ棒

直径三センチメートルのまっすぐなヌリデンボウ（ヌリデ）を選んで、三十センチメートル



（写真127）ものつくりに使用する道具類。



(写真129)



(写真128)

ほどに切り、皮を削る。太い方を四ツ割にして、後でマユダマがはさめるようにする。先は削つてとがらせる。(写真百二十八)

(二) アーボヒエボ

直径三センチメートルの竹を百三十センチメートル程に切り、先を十六割りにする。ヌリデンボウの直径一センチメートル、長さ十三センチメートルぐらいのものを十六本用意し、半数の皮を削る。

竹は、内側をそいで、よく広がるようにする。竹の先にアーボ(皮を削った方)とヒエボを適当にまぜてつける。(写真百二十九)

(三) ハナ

一段の小バナは四十、大バナ(写真百三十)と十二段バナは一本作った。小バナは二ワトコ、大バナはムラサキシキブ、カズ、十二段バナはムラサキシキブとニワトコを使った。十一段は百一千センチメートル、大は四十センチメートル、小は十五センチメートル位に切り、皮を削る。ハナカキナタで、木の先から元に向かってハナをかく。(写真百三十一)ハナビラの数は、七・五・三の十五か、



(写真130)



(写真131)

倍の三十にする。

(四) ワキサシ (写真百三十二)

ややそりのあるヌリデンボウを選んで、大刀六十→七十センチメートル、小刀五十→六十センチメートルに切る。大刀はやや太目にする。柄と鈎部を残し、刀身部の皮を削る。柄に柄紐の巻き目を入れる。藤のツルを割いたものを、柄部から切先に向けて、右巻きで上るように巻きつける。(写真百三十三) ドンド焼きの火で焼いて巻いた藤をはずす。

(五) テンガ

直徑六→七センチメートルのヌリデンボウを、長さ十七センチメートル位に切る。ナクで木の芯を通るように四ツ割にする。幅三センチメートル、厚三ミリメートルくらいの粧板にする。柄の後になる所を山形に、先の刃の部分をやや薄く削る。柄の角度にあわせて、錐で穴をあけ、焼け火ぼしで大きくする。

竹の柄をつけ、刃の部分を黒で塗る。

(六) エンガ (写真百三十四)

直徑七→八センチメートルのヌリデンボウの木を長さ十五→十六センチメートルに切る。木の芯を通るように四ツ割りにする。ナタで、幅二・

五センチメートル、厚さ三ミリメートル位の粧板にする。

トル位の粧板にする。

錐で柄の角度にあわせて穴をあけ、これを焼け火ぼしで大きくする。

この穴に竹を割って細くした柄を入れる。



(写真132)

錐で、締紐の穴を二つあけ、支え



(写真133)



(写真134)

棒とひっかけをつけて水引で締める。締棒をはさむ。

エンガの先の刃を黒で塗って完成。

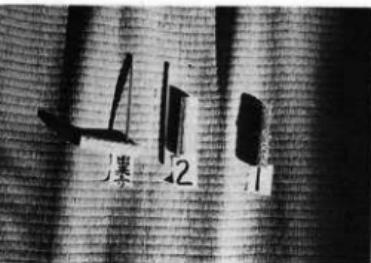
(七) キ ネ (写真百三十五)

二一〇一・五センチメートルぐらいのヌリデンボウを長さ十センチメートルぐらいに切る。皮を削りとる。柄をつける所に焼け火ばしで穴をあける。柄をとりつける。

(八) ハラミバシ

直径六センチメートル位のヌリデンボウの木を二十センチメートル位の長さに切る。皮を削る。木の芯を通るように四ツ割にナタで割り、更にこれを削って、断面が長い三角形になる厚さ一センチメートルほどの粂板をつくる。(写真百三十六)

木芯に近い方を削って、一本をあわ



(写真135)

せてもみの形になるようにし、先を箸のよう削って完成。神棚に三、仏壇に一、恵比須様に加えて、家族数作

る。

(九) その他

農具は二つ作った。ワキザシは三本で、六十センチメートルが一本、四十五センチメートルが一本である。小は道祖神に持っていくものと、神と人の境である神棚に飾った。大は、サイの神と人との境である入口の上に飾った。

道具は、竹ナタ・ナタ・ハナカキナタ・ノコギリ・キリ・ハサミ・キリダシを使った。

ブク儀は上原家では作らないが、町内では作る家もある。



(写真136)

四、お飾りかえ

飾りかえは、正月十三日である。はずしたものは、ドンドン焼きに持って行つた。

ハナのうち一段の小さいものは、次の所に供えた。仏壇・えびす様・釜神様・馬屋・床の間・便所神・玄関・門口（トボグチ）・屋敷神・土蔵・コヤシバ・作業所・井戸神・墓地・道祖神・庚申・二十二夜・馬頭・弁財天・弘法さん・神社・お堂・天王さまである。神棚には、一段の大きいものも供えた。

年神棚には、十二段のハナを一本供えた。（写真百三十七）

マユダマ飾りは、座敷・家の外・ドンド焼きに持っていくものと三種類作った。

座敷に飾る木は、ヤマクワ・ナラ・カシの木で、ヤマクワ・ナラにはマユダマだけをつけ、カシの木には、「かしもち（貸し持ち）」になるように四角の餅をつける。（写真百三十八）カシの木は大黒柱につける。

外は、倉・便所・作業小屋で、ヤマクワの小枝に、マユダマ三・五個の丸い形のものをつけたものを飾った。

ドンド焼きには、ミズブサの木に十二個のマユダマをさしたものを用意し、入り口においておいた。

マユダマの粉は、くず米の粉を使い、暮のうちに石臼でひいておいた。

十二日の夜、作り、十三日の夜にふかして木にさした。

十六マユダマという大きいだ円のものを十六個、マユの形をしたマユダマを数個作り、他は球形のものだった。

十六マユダマは、あちこちにさした。

五、道祖神とドンド焼き

ドンド焼きは、村のまん中の道祖神の四ツ角でやった。

最初の人が火をつけ、そこへ正月飾りをかついでいって燃やす。お札・書き初め・お飾りを燃やす。書き初めは、燃えた紙が上がるときが上がる（上達する）。
厄年の人が、その場でお金をまいた。昔は一～五銭、五～十銭とかわり、ミカンをわけた。この金をうちに持つて帰ると火事になるといわれ、すぐ使った。



（写真137）年神棚に供えたマユダマと十二段のハナ



（写真138）かしもち（貸し持ち）

マユダマをあぶって食べるとかせをひかないといって食べる。自分の家のマユダマは食べず互いにくれあう。そのためドンド焼きのマユダマの木は長いものを使う。(写真三十九)

道祖神には、一段のハナとワキザシを供えた。

六、十五日粥（小豆粥）

年神様の前のマユダマを二つ取っておいてカユカキ棒の頭にさして、粥をかきまわす。「今年も田植が無事にできますよう」と唱え、粥を田に、カユカキ棒をマンガにみたてて、かきまわす。かきませたあと、半紙をかぶせ、水引をかけ、神棚にあげておく。

ハラミバシは、粥を食べるのに使う。食べる時は熱くとも、吹いて食べるなどと言われた。

カユカキ棒は、苗代を作った日に、田の水口にさす。

七、マユカキと片づけ

正月十六日は、「マユカキ」といって、マユダマをとった。

とったマユダマは、二斗はいる長いおけに入れておき、貴重な食料品なので、いろいろの火で焼き、砂糖しょゆにつけて食べた。

この日は、小正月の供えもの、飾りものを片づける日だった。

ハナは燃やし、ハシは使いすてにし、エンガはおもちゃに、アーボ・ヒーボは立てたままにした。

八、養蚕とつくりもの

二月初午に、ナラの木にマユダマをさして進せる。小正月のナラ・ヤマクワの木を少しのこしておいて使う。おかいこの神様という。



(写真139)

また、マユの形のマユダマを作る点にも関係がうかがわれる。

九、その他

他の家で、ハナをかく木として、ハギ・ネコヤナギを使うことがある。

フク依は、上原家では作らないが、作る家では、米・アワ・ヒエであり、上原富次氏が「つくりもの」を作つて飾つている松井田町五料の茶屋本陣にはおいてある。

便所に進せたマユダマを食べると、虫歯にならないという。

農具の「つくりもの」は、正月様に供えるといい、農事が順調に進むように願うという。

正月桶の前にひもをわたし、ぶらさげる。

水引にゆわえて、大正月の飾りととりかえる。

歳徳神のお札を、屋敷内の恵方の木に水引でしばりつけておく。

また「年中払い」といって、一年中玄関にはつておいた。

※マユダマをゆでた汁を柿の木の根にかけ、ナタで切るまねをして、「うんとならねえとぶったぎる」といった。

十、まとめ

上原家の「つくりもの」は、現在自家のために作る他、公民館・茶屋本陣のために作っているなど、伝承の広がりを感じさせてくれる。

小正月のつくりもの (1)

—西毛編—

群馬県無形文化財緊急調査報告書

昭和五十二年度

岩島の麻

舟大工と川舟

伊勢崎の耕

群馬の妻細工と竹細工

群馬の屋根葺と壁塗

群馬の和紙

手描き紋章

群馬の妻細工と竹細工

群馬の和紙

手描き紋章

群馬の屋根葺と壁塗

群馬の和紙

手描き紋章

群馬の屋根葺と壁塗

—吾妻編—

印刷 東方印刷株式会社

昭和六十三年三月十五日 印刷
昭和六十三年三月三十一日 発行
群馬県教育委員会文化財保護課
群馬県教育委員会

編集 編集
群馬県教育委員会文化財保護課
群馬県教育委員会
元371 前橋市大手町一丁目一一
☎ ○二七二(23)一一一(代表)